
忘らるる神の欠片～眠り男の英雄譚～

とおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘らじるる神の欠片～眠り男の英雄譚～

【Zコード】

N1270W

【作者名】

とおん

【あらすじ】

夢をもって王都にやってきた大地の民の田舎娘キアラ。けれど、
都會は怖いところだつた……。続くトラブル、拾つた災難。キアラ
が半泣きで頼つたのは、これまた王都で出会つた、大地の民の珍妙
な男で……？

タイトルちょっと変えました。

♪ルルルーベ（前書き）

なるべくテンポよく、サクサク読み進める話を用意しましたー。（予定）

ふるわーぐ

たぶん。

じうなることば。

最初から、ちゃんとわかつていた。

「ねえ。後悔してないの？」

「後悔つて何を？」

「うちは、ちょっとした心臓に悪いドキドキ感を持つてそう聞いたのに。

やつは顛々とした調子で首を傾げた。

この先は、大広間。

吟遊詩人が謳う英雄譚ヒロイック・サーフで言つならば。

今はさしづめ、最終決戦のさいのひととき。

緊張感も最高潮に、観客だつて固唾を呑んで成り行きを見守る場面のはず。

それなのに、呑氣にあぐびなんとしているこの男はなんなのだ。

「だから……！ 私がもつてきた厄介話に巻き込まれて、こいつ成り行きになつちやつたことだよ！」

その事実に、少しくらこは反省してたし。

「この男が、そんな責めるような言葉を吐くなんて」とは思つてこなかつたけど、それでもあぐびなんてしなければ。

ちゃんと、やうつとセツげなく。

「めんねつて謝るうと思つていたのに……
おかげで、おもいつきり溜息ついちゃつたし。
かみついたし、怒鳴りつけちゃつたし。

あぐびなんじ、この重要な場面でしなければ……！

……おかげですべてが台無しだ。

「「」めんだけど、そろそろ行かない？　おれ、ちゅうと眠いかも
……」

少しくらいには空氣読め！

内心の毒づきなんてそ知らぬ顔で、またひとつ。
やつは、ふああああと盛大なあぐびをきます。

「わあがに」「」でや、睡眠とるのはまずいだろ？」

この期に及んで、能天氣にそんな台詞を吐くもんだから。

申し訳ない気持ちなんて吹き飛んでしまつた。

謝るうなんて殊勝な心がけも、今ははるか彼方だ。
そんな事実があつたことを認めたくない。

「あのね……」

「おれね、後悔はしない主義だから、安心していいよ」

さうに盛大な文句を浴びせよつとした、その瞬間。

ぽん、と反則のよつて頭のてっぺんに乗せられた、その手。

でも、それは一瞬で。

次の瞬間には、先に立つてあるいていく背中が見えた。

ぶるーぐ（後書き）

楽しんでいただければ、嬉しいです！

ひとつめ。

立ち並ぶ家々は、どの家も透明なガラスつきの窓と重そうな扉を持つていた。

細い細い路地までもが赤い煉瓦で舗装され。

市を行きかう人々は、村の祭りでめかしこんだ人たちよりもきれいに着飾り。

村の祭りよりもぎやかな喧騒であふれていた。

「うわあああ……」

乗せてもらつていた馬車から降りて。キアラは思わず感嘆の声を上げた。

王都といつのはなんて華やかなところなんだね！」

「なんか……ニンゲンがいっぱい」

きょろきょろと辺りを見回し、そんな感想を口にする。

すると、御者台で手綱を取つていた気のいいおつちゃんが豪快な笑い声を上げた。

「そりや そうだらうよー！ こゝはニンゲンの町だからなー！」

おつちゃんは人間だったが、見れば見るほど、キアラと同じ大地の民によく似ている。

口の周りから顎にかけてびっしりと生えた黒いひげ。

太い首や出っ張った腹。

刺青をほどこした太ももほどの太さのある一の腕も。

短く刈り込んだ黒い髪の毛の上に、ベルセルク大地の民の特徴とも言える獸

のような耳がないのが本当に不思議でしうがない。

「あそこに見えるでつかい建物が、お城つてやつだ

「おしる？」

「おまえさんが探している、王子様がいるところを

おつちゃんの言葉に、キアラはただでさえ丸い目をむいて大きく

見開いて、その太い指先が指示する方を一生懸命見やつた。

どこまでも続く、町並みの、少し途切れたところ。

小高い丘の上に、周りをぐるりといかめしい壁で囲まれた、ひと
きわ白く高い建物があった。

「……おうじさま」

「そうか。

あそこには、最終田標の王子様がいるのか。

じつとみつめていると、おっちゃんがさらに面白そうに笑った。

「まあ、お城なんてところは貴族じゃねえと入れんと思うがなー」「

「きぞく?」

「大地の民に、その概念を説明すんのはちつと骨なんだがな
顎に手をやりながら、おっちゃんはうつむ、と低く唸る。

大地の民、またの名をベルセルク。

こうなれば半獣の民で、特徴的なのは頭の上有る獸の耳と、肉
食獸のような細い瞳孔の瞳。

戦闘能力に長けた民で森に棲み、まれに傭兵としてこの腕を売つ
て、戦を渡り歩く者もいるといつ。

彼らは年長者や経験を積んだものを敬いはするが、

身分という概念も、血筋という概念も持ち合わせてはいないので。

「まあ、王子様よりちつとばかりえらべないのが貴族ってことだ」

「……おうじさまは偉いの?」

「王族ってのは、無条件で偉いもんさ。そういうことになつとるん
だ」

キアラは難しい顔つきでふうん、とだけ頷いた。

そうか、おうじさまはエライ人だったのか、とただそれだけを脳

みそに叩き込む。

「どうエライのかはわからなかつたが、無条件でエライというのだから、呪医のようなモノかもしれないと予測してみる。わざとなにか、おうじさまにしか出来ないことがあるのに違ひない。」

「まあ行くだけ行つてみればいいや。もうじき武術大会もあるとうし、うまく参加できれば遠目にくらには拌めるかもしけねえぜ？ 大地の民つてのは、武術が得意なんだらう？」

「私はあんまり強くないとと思う。あにさまやあねさまたちは強いけど」

町へ出るといつたキアラに、鑑別として彼らがくれた大剣は今もしつかり背中に背負つているもの。この大きな剣を、あにさまやあねさまたちのようにうまく使いこなせる気はしない。

「まあなんでもいいけどよ。とりあえず、そのほかーんと口を開けるのはやめた方がいんじやねえのか。おのぼりさん丸出しだぜ？ 財布だつてすられちまうよ」

おっちゃんは苦笑交じりにしゃべつて、退屈そうにしていた馬に、ひとつ鞭をくれた。

「そんじゃな。運命の女神の氣まぐれがあつたら、また会おうぜ」

「じつい手をひらひらとふつて、おっちゃんはのんびり馬車を走らせて去つて行く。

「ありがとう！」

大きな背中にお礼をいつて、キアラは大剣をしつかりと背負いなおした。

夢にまで見た、王都ディイディン。
目的を達するまでは、きっと帰らないと。
そうちたく心に決めた。

ふたつめ。

意気揚々と市に足を踏み入れて、キアラは辺りを見回した。右にも左にも、屋台やらなにやらが立ち並ぶ。

本の中しか見たことのないような、鱗に覆われた奇怪な生き物や、南国の果物。なにかの肉やら野菜やらが、生のままだつたり調理されたりしてさまざまに市場を彩つている。

「すういな……」

「おう、ベルセルクのねえちゃん!」

ぱうっと辺りに見とれていると、串に肉を刺して焼いている男から威勢のいい声がかかった。

「食つてかねえか? ベルセルクが普段食つてる肉よりは鮮度は落ちるかも知れねえが、味は負けてねえぞ!」

香ばしい香りが、風に吹かれてふわりと鼻先をかすめていく。くう、と体が空腹を訴えた。

腹の辺りに手を当てて、考えることしばし。

「ん……」

香ばしいにおい。

うまそうな焼け具合。

どこまでも誘惑してくれる肉の串……条件はただひとつ。値段だ。

た、たかい……

値段としては、小銀貨一枚。

銅貨でいえば、10枚分。

里では、こんな串焼き、銅貨3枚程度のものだ。あまりの高さで、空腹もまぎれて考え込んでしまつ。

.....جی، پاکستان

おなかは減つていたし、串焼きはつまそうだが。
そうそうお金に余裕があるわけでもない。
これから、宿を見つけてしばらく滞在し。なんとか「おひじりま」
に会う手立てを考えなくてはいけないのだ。

あまりに真剣に考え込んでいたせいだろうか。
人の流れの邪魔になるということが、すっかり念頭から抜けていた。

おかげでしたたかに突き飛ばされて、数歩を
「んなところで突つ立つてゐんぢやないよ！」

買い物籠を下げるおばちゃんが、悪々しゃうに声を荒げて通り過ぎていく。

「すいません……」
ちいさく謝罪を口にして、キアラは溜めていた息を吐き出した。

突き飛ばされたのは痛かつたけれど、おかげで目が醒めた。
市場の陽気にまどわされていらぬ買い物をしてしまつといつだつた。

。へせひば

ぐるぐるなるおなかをなだめつつ、曖昧な笑みを屋台の男に向け、
キアリはそいつと串焼きから背を向けた。

もつと安くて、おなかが膨れるものを探そう。

初めて王都にやつてきたのに、もう財布の心配をしなくてはならないのは切ないが。

遊びにきてこるわけではないのだから、もつとこつかつしなくてはいけないだろ?。

『ひとつで上都に行くとか、だいじょうぶなの、れい?』

心配性な姉のひとりの顔が脳裏に浮かぶ。

「だいじょうぶだよ、あなわ。私ちやんと出来るもの。ちやんとねづかせられていいよー。」

幻にやつ返事をし。

キャラはきょりきょり辺りを見回した。

とりあえず、安宿を探さなくてはいけない。

ふたつめ。（後書き）

小銅貨10枚＝銅貨1枚（100円程度）
銅貨10枚＝小銀貨1枚（1000円程度）
小銀貨10枚＝銀貨1枚（10000円程度）
銀貨10枚＝小金貨1枚（10万円）
小金貨10枚＝金貨1枚（100万円）

小銅貨1枚10円程度と思つていただければいいかと。

お祭りの時の串焼きと思えば、そう高くもないのかなあ……

みつかる。

宿は比較的すぐにみつかった。

あまり安いところは無用心だと心をさせられていたので、そこそここの値段の宿に当たりをつけた。表通りに近く、清潔そうな宿だった。

一泊で銀貨一枚と半銀貨が五枚。

結構な出費だとは思つたが、そう王都に長居をするつもりもなかつたので、とりあえずはよしとした。4～5日なら滞在しても、おつりが来るほどいの所持金は用意してある。

「お代は先にいただくことになつてゐるんですよ」

一階のカウンターで宿のおかみさんしきひとひかりとやう促され、キアラは頷いて懐から財布を取り出す。
いや、取り出したりとした。

「あれ……？」

あるはずの場所に、財布はなく。

指先はひたすら空振りするばかりだ。

「え？」

あわててもう一度懐を探るが、手になじんだ財布の感触はどこにもない。

れーっと血の気が音を立てて引いていくのがわかる。

串焼きの屋台の前で、買おうかどうかを悩んだ時は、確かにあつたと思つ。

そのあとは？

青くなりながら、懐の中を、せりて、寧むかしく探つてこべ。

手巾。傷薬。短刀。

財布。

私の、財布。

全財産。

ない、かも……？？

完全に、硬直したと思う。

心臓がどきどきと全力疾走をはじめる。
田の前が真っ暗になつたような気がした。

ない、ないの？

ほんとにないの？

ない、ないの？

ほんとにないの？

いつなくした？！

いつ落とした？！

頭の中はめまぐるしく記憶をたどる。

けれど、決定的な瞬間は、なぜか思い出せない。

確かに、懐に入れておいたのに。

「……まさか、お代をもつてないの？」泊まりうとしたとかじやないですね？」

ひんやりとした、おかみの声が耳を打つ。

「いえあの、ちゃんと持つてたんです……」「でも今ない？」

「ちゃんと、」「……」

じゅしょく。

じゅしょく、じゅしょく。じゅしょく。

「じゃあ、掏られたんだろ？」

「あんた、みるからに田舎から出てきた小娘だからね」

密じやないとわかった途端、おかみの声せりて呟いた。

「言つとくけど、あんたの事情を斟酌する余裕も義理も、つむじはないからね」

じゅしょく。

お金、なかつたらじゅしょく。

冷たいおかみの声も、耳には入らない。

「そこにいたら、ほかのお客さんの邪魔になるんだよ。ひとつと行っておくれ」

乱暴な手つきで宿を放り出されても、キアラは自分で動けなかつた。

思考は迷走しまくって、ただじゅしょくを連発してくる。

今までじきやかでいい町だと思っていた王都が、突然冷たい顔つむになつたような氣をえした。

お金がなかつたら、まず今日のじゅ飯が食べられない。

まあ、それくらいは我慢できる。

大地の民の体力は数日絶食へりこへ軽く耐えられるはずだ。

でも。

お金がなかつたら、王都に居続けることが出来ない。

おひじりを採ることも出来ない。

いつたん森に戻ることしても。

お金がなければ、戻ることも出来ない。

王都から森までは、結構な距離があるので。

そして、何よつの問題点は。

お金を稼ぐ手段を、どうしても思ふが浮かべるといじが出来ない」と
だった。

よつね。

キアラにできる」とは実のところ、あまりない。一応大地の民の一員として、武術系一般は幼いころから叩き込まれているが、そう強い方ではないのである。

傭兵、かなあ……

それくらいなら、できるかなあ……

とはいっても。

自分になにができるか、ということを考えた時に、一番にその職種が頭に上るくらいには戦うことになっていたし。そう強くないとはいつても、大地の民基準のことなので、人間と比較すればまあ上級の部類にかるうじて引っかかるくらいの実力を有していることも自覚していた。

でもさ、でもさー……

私なんか雇つてくれないよねえ……

問題点は自分でもちゃんとわかつている。
一も二もなく外見なのだ。

頭の上にひょっこり生えた獸の耳。

猫の瞳をおもわせる瞳孔が細い黄金の双眸。
体の線は細くて薄い。子供っぽくて華奢で。

どう頑張つてみても。

得物の大剣に振り回されていそうなイメージが付きまとつてしま

う。

戦闘職種には見えない、この外見。

あ～も～。

なんでもつと、あねさまとかあにさまみたいに、「じつくかつ」よく生まれてこなかつたんだね。

そうすれば、傭兵も戦士も、どんな職種も思いのままだ。

ふかぶかと溜息をついて、人波を眺める。

どうにかして、実力を見せる機会はないものか。

一度みてもうえさえすれば、雇つてもうえるかもしれない。

もうひとつ、息について。

キアラはどうにかその場を動いた。

こつまでもここにいてもしょうがない。

ここにいても、お金は稼げないし、失くしてしまった財布が出てくるわけでもない。

少しでも前向きになろうとは思つたが。

財布をなくした衝撃はそう簡単に消えてはくれなかつた。

「ねーちゃん」

通りを外れて横道にそれたキアラは、そのあたりに乱雑に積み上げられた木の箱の上に座りこんだ。

ぼんやりとそこで通りを眺めていると、遠くで声がした。

「ねーちゃんつてば」

別に無視をしていたわけではないのだが。

よもやこの知り合い皆無の王都で、自分に話しかけてくるものが

いるとは思えなかつた。

けれど、服まで引つ張られれば、自分に話しかけてきていのとは疑いようもない。

空のままのまなざしを向けると、一〇歳ばかりの少年が、よく田に焼けた笑顔を向けていた。

「よひ、ねーちゃん。元氣ないね、ビーしたのわ」

少年は、『じぐじく普通の人間のようだつた。

今日明日の衣食住に困つてゐるふうでもなく。

せいろくんで遊び転げてゐる、王都の少年、といつ感じだ。

「……なんでもない」

一通りの観察をしたあと、キアラはまたふいつと視線をそらした。子供は別にきらいではないが。

今、子供と一緒に遊びたい気分ではなかつた。

「おいらさー、おなかすいてるんだけど。小銭がこんだけしかないんだ」

そういつて、少年は、キアラにしつかり握り締めていた手を開いてみせた。

その幼げな手に握られていたのは、小銀貨が三枚。

「あの、肉串がたべたいんだけど。お金がたりないんだよね?」

そう、と氣のない様子でキアラは応じた。

「ねーちゃんも地方から出てきた感、満載だし。奢ってくれとはい

わないからさ。半分お金出してくんない？ 半分こしょーよ

隣は何をする人ぞ、とばかり。

他人に興味はありません的な顔をして、せかせか動いている王都の人間に見ては、なんだろう。田舎的提案だと思う。

森でなら、こんな提案は日常茶飯事だ。

同年代の子供らは、みんな兄弟姉妹のようなものだし。上の世代はだれでもあにさまあねさまだ。

その上ともなれば、みな父であり母であり。爺さまであり婆さまなのだ。

「悪くない提案だと思つただけどや」

ぱつり、とキアラは力なく咳いた。

きらきらとした少年の笑顔がとてつもなくまぶしい。

「私の所持金、キミよりも少ないから。他をあたつたほうがいいよ」

淡々と事実だけを告げて、ふたたび通りへと視線を転じる。
まぶしい笑顔のまま、少年がカチンと凍りついたのが目の端に映つた。

「は？ なに、もうやられちやつたあとなわけ？」

そして、数瞬。

ひびいた少年の声は。

先ほどの純真そのものな聲音ではなく、はげしく侮蔑のこもつた聲音となっていた。

まひる。(後書き)

ヒーローがいつまでたっても出でません……

こいつら。

キアラは、事態が飲み込めないまま、ただ幾度か目をしばたいた。純情少年はどこにいってしまったのだらう。

まるで世をひねたような眼差しをしてこちらを見てくるこの少年は、本当に先ほどの少年と同一人物なのか。

「ほけつとした顔をしているから、やつやすやつだと思つたんだよね……おえることはみんな一緒つてわけか」「…………やつやすこつて、なにが？」

もしかして、一重人格じやないのか、と思いつつも、そう聞くと。少年は馬鹿にするのを通り過ぎて、逆に同情したよつた顔つきになつた。

「馬鹿じやねえのか、ねーちやん。おいらまねーちやんを騙そいつとしたんだよ？ だつて、騙しやすそうな顔しているから」

少年が説明してくれたところによると。

腹が減つてしまつがないから、半分お金を出して欲しい、半分は買った分を返すから。

そういうて、相手に半額を出してもうつて、それをもつたままとんずらうするのだそうだ。

成功するポイントは、食べ物屋の店先で買おうかどうかを悩んでいた観光客（それも田舎から出てきたぽいひと）を狙うことらしい。運がよければ、全額分を出してもうえたりする」ともあるのだとか。

「財布だって、どうせお金としてるときには、掏られたとかそんな

んだろ？ やすがにかわいそだだから、授業料はタダにしておいてやるよ。ねーちゃん、王都に順応できなさそうだし、早めに里に帰つた方がいいと思つよ」

んじゃ、またねー

ひらひらと面倒くさそうに手をふって、人波まぎれていく少年の背中を、キアラは半ば呆然としたまま見送つた。

あんなに純情そうに見えた少年が、詐欺師。
まあ、片手間に小遣いを稼ぐようなものだが、それでも人を騙すのは詐欺師に違いない。

それも充分に驚きだが、馬鹿にされた拳句同情され、手の内をばらしてもう引っ掛かるなよと、明らかに年下の少年に諭されるのはいかがなものか。

ちょっと。

いや、大分情けない気がする。

というか、あんなに小さな子供までが犯罪者。

都會といつところは、なんて恐ろしいところなんだらつ。

目的のおうじさまを遠目に見ることさえ果たしていなかつたが、もはや森に帰りたい気分だつた。

けれど、問題点がひとつ。

帰るといつても、どうやって帰ればいいのか。

お金もないのに。

はああ、と溜息をついて、箱の上で膝を抱え込む。
その膝に顔を埋めよつとして、キアラははつと顔を上げた。

鼻先をかすめた、かすかな香り。

森の奥にある、世界樹の。翡翠色の幹をいぶして出来る香の
ような。

爽やかで懐かしい香りが、ふわりと風に溶けた。そんな気がした。

そうして、視界の端をかすめた、あの模様は。

キアラは箱を後ろに蹴り倒すようにして、路地を飛び出した。

「待つて！」

叫んだキアラに、道行く人が驚いたように振り返る。

「待つて、あにさまつっ！－！」

見えたのは、ほんの一瞬だったが、キアラの目はいい。
絶対に見間違えじゃない。

目深にかぶつたフードつきのローブの下から、ちらりとみえた、
二の腕。

太くたくましいその腕に見えたその紋様は、大地の民が成人の儀
のときに自ら彫りこむ刺青だ。大地をたたえ、世界樹をたたえた祈
りの紋様。

「待つて！－！」

もう一度鋭く叫んで、キアラはローブ姿の背中に追いすがった。
必死で手を伸ばして、ローブの端をつかむ。
はらり、とローブが。

その頭から、すべりおちた。

こぼれたのは、灰色の長い髪

こいつね。（後書き）

次こそ、ヒーローの登場でしょうか……

むつめ。

灰色髪の男は、驚いたような顔つきで、歩みを止めた。

「……大地の民？」

大地の民の、特徴的な瞳孔の細い金色の眼差しが、いささか不審げにこちらにむけられている。

「あにさま」

人間には理解しがたいかもしれないが。

大地の民の生活様式というか、生活形態は少しばかり変わっている。

同年代の子供はみなひとつところに集められ。

里人すべてが祖母であり祖父であり。父であり、母である。いうなれば、個の家族という認識はなく、里ひとつがすべて家族のようなものだった。

つまり。

たとえ、顔も知らない相手だったとしても。

同じ大地の民で、相手が年上の男ならば。それはもう兄なのである。

灰色髪の男を、キアラは知らなかつた。

知らなかつたけれど、ここで助けをつかまなければ、キアラに明日はない。

同種族にあつたのがこの状況下における最大の幸運であるとばかりに、キアラはロープをつかむ手に力をこめた。

「あにさま、私はキアラといいます。お願ひです、助けてください、

困ってるんですね

はあ、と男は困ったように瞬いた。

髪と同じ色をした、灰色の獣の耳も、動きを決めかねたように落ち着きなく動いている。

「ね、あにわま。困ってるんです」

「……おれは、ジインと言うんだが。ここじゃ、人の邪魔になるから、すこし場所を移そつか」

促されるままに、キアラはジインについて、大通りを少し外れた裏道に入る。

ジインは、もしかしたらキアラの熱い視線に負けたのかもしれない。

懐から出した小銭で、屋台で売っていた冷たい果実水を買って渡してくれた。

「で、キアラ。なんで困ってるんだ?」

冷たくひえた果実水はうまかった。
やさしい甘さに、思わず口元がほころぶ。

「おいしいです」

「……そつか」

結果的に、ジインの問いを無視したことになるが、かまわないと思つた。

こんなにおいしい飲み物は初めてだ。

よかつたなど、いささか投げやりに呴いたジインは、そのあたり

に積み上げてあつた木箱に頬杖をついて人波を眺めている。

果実水を舐めるように飲みながら、キアラはもう一度ジインの腕の彫り物をみつめた。

里の誰よりも複雑な紋様が彫られていると思う。

大体が、文様を自分で彫りこむその痛みのために、簡素な紋様を好むというのに、里のじいさまたちよりもずっと細やかでうつくしい紋様がそこにはしっかりと刻まれている。

神代の祈りの言葉が、省略されずにしっかりと彫られているのだ。

「ジインにいたま。私、お財布をなくしちゃったんです」

紋様は、簡素なものが好まれるとはいえ。

複雑であれば複雑であるほど、いいのである。

それは勇気と忍耐力の象徴であり、誇るべきものだ。

こんなに複雑な刺青をもつジインは、きっと懐も深い人物に違いない。

多大なる期待をこめて、キアラは果実水を口に含みながら、ジインをみつめた。

けれど。

聞いていたのかいなか、ジインは顎が外れそうなほどの大あくびをしている真つ最中だった。

ななつめ。

「あ、あの……？」

キアラの口許は少なからずひきつった。

恐らうだが。キアラの認識に間違いさえなければ。

今、この場面は重要な局面を迎えていくはずである。

王都に出てきて、財布をなくし、困っている少女。

たまたま通りがかつた同種族の、恐らく頼りになるであろう男。

助けを求める少女。

かつこよく！…その願いを容れる男。

昔から吟遊詩人がよく謳う、英雄譚はすべてここから始まるはずだ。
勇者だって、助けを求められなければ、冒険には出ないはずなのだ。

それなのになぜ。

この男はあくびなんて香氣にしているのだろうか。

「ああ、『じめん』

キアラの呆気にとられた眼差しに気がついたのか、ジーンは軽い調子で謝罪を口にした。

悪びれぬ様子で頭をかきながら、またあくびをひとつする。

「なんか眠くてさ。それで、なんだっけ？」

呆気にとられたまま、キアラはゆっくりと瞬いた。

言つなれば、英雄的存在をこの場面で担うであろうこの男が、こんな調子でいいのだろうか。

いや、あんまりよくないだろ？ 絶対よくない。

傍観している分にはいいかもしないが、英雄が英雄になつてくればければ、キアラの窮地は救われない。

もつとも、お金だけを借りられればすむ話ではあるのだけれど。そこはたぶん、気分の問題なのだ。

あぐび。それも顎が外れんばかりの大あぐび。

話の途中なのに。

恥を忍んで、助けてくれないかと頼んでいるのに。

「つまり、ですね」

謙虚に頼むのはもうやめだ。

『ぐりと、果実水の最後の一 口を豪快に飲み込んで、手の甲で口の辺りをぬぐつた。

「私が聞きたいのは、私が財布を落としたといつ話を聞いて」

腰に手を当てて、ジアンの前に回つこむ。

ずいと身を乗り出して、その金色の綺麗な瞳を覗き込んだ。

「かわいい同族の妹の窮地を。もとから助ける気だったのか、それとも今、助ける気になつたのか、ということです」

ジアンはその言葉に。一言で言つなれば、きょとん、とした。

言葉を吟味しているのか。数回まばたきを繰り返す。

「なんだか、すごく、前向きな質問だな」

あふ、とせつときからすれば、いくぶん遠慮がちなあぐびをもうひとつだけして、ジ茵は苦笑まじりにしつぶやいた。

「助ける以外の選択肢はないのか？」

からかうようなその口調。

まあ、たしかに普通なら。

『助けない』『いやいや助ける』『乗り気で助ける』『他の手を考える』へりいの選択肢はあつてしかるべきだらう。

「絶対に助けてくれると、信じていますから」

「ここまで精緻な紋様を腕もつ、同種族の男。しかも、年上。」
この王都で。この困った局面で。

勝手な言い草だと、理性ではわかつているが。

このタイミングで現れてくれるのだから。

ヒーローにちがいないのだ、この男は。少なくとも自分にとつて。

「まあ、あれだ」

ジ茵の口許に、からかうような笑みが浮かんでいる。

これはもう、じょうがない助けてやるか、という流れに違いない。

期待を眼差しにてて、みつめるキアラにジ茵は言った。

「おれ、眠いからちよつと寝るわ。悪いけど、その話はまたあとでな

なんだろ？

今、盛大な空耳を聞いたような気がする。

呆気にとられるキアラの目の前で、ジインは木箱の上に片膝を立て。その上に顎を乗せた。

「おやすみ」

そして、礼儀正しく一言。

「え、ちょっとあの？」

キアラが止めるまもなく、その数瞬後。

すう、と安らかな寝息が聞こえた。

すばらじいまでの寝つきのよさ。赤ん坊よりも寝つきがいいんじゃないだろうか。

「ていうか、なんで寝てるの、この人？」

まだ、これが乗合馬車の中とか。移動途中の獣の上とか。そういうことなら話はわかる。

けれど、ここは公共の場で。おまけに道で。仮に雨とかが降ってきたとしても屋根なんかはないし。いや、それよりも前に、こんなところで寝るなんて、ちょっと用心が悪いような気がするのだが。

お財布とか、取られちゃっても知らないよ？

途方に暮れたまま、キアラはすうすう眠るジインの顔をみつめた。大地の民にしては、白く滑らかな肌。通った鼻梁に薄い唇。長いまつげ。

……なんか、私よりも美人じゃない？

さらりと通りを渡る風に、灰色の髪がとける。

獣のような耳が、時折ぴくりと音に反応するのも、またかわいらしい。

なんかいろいろ、負けてる気がする。

そんな感想を胸に、キアラもまた、木箱に腰をかけて通りを眺めた。

せわしなく行き交う人々。いろいろなものに、無関心なその横顔。王都って言うところは、どうも人と人との関係が希薄らしい。たまに困ったふうな人がいても、気づいていながらも、そのまま立ち去ってしまう人の、なんと多いことだろう。

しばらくそのまま、通りを眺めていたキアラだったが、そのうち腹がぐうとなつて。

ふと、われに返った。

まだそう長い時間がたつたわけではないが、ジインはいつまで眠るのだろう。

その秀麗な横顔をみつめて、頬をちょっとつづつみてみたりもしたが、ジインが起きる気配は微塵もない。すうすうと気持ちよさげな寝息をたてるばかりである。

「まあいいか」

どうせ、いくあてがあるわけでもないし。

お金もないし。

起きるまで待つたとしても、そうにか困るわけでもないし。

そう開き直つて、キアラもまた、膝を抱えて顎をその上に乗せてみた。

うん、意外とくつろげるかもしない。と、そんな感想を抱く。

不穏な香りが鼻先を掠めたのは、ちょうどそんなときだった。

え？

森では、時折かいだ香り。そつ、特に狩りのときには、濃厚な、命がこぼれる香り。

あかくあかく、ながれる死の香り。

この王都の雜踏には、あまりにも不似合いな。

膝を抱えていた手をそつとはなし。キアラは油断なくあたりを窺つた。

耳を動かして、音もさぐる。

そうすると、ちょいちょい香りが流れてくる方から、ぱたぱたとせわしなく駆ける音が聴こえた。そしてその後からは、乱雑に続く複数の足音。それもおそらく、武装した。

「いた、ジインン！」

声と共に、雜踏から飛び出してきたのは、まだ10をいくつか過ぎた程度にしか見えない、育ちのよさそうな少年だった。やわらかく波打つ、金色の髪。夏の空の色を移した瞳。のばされた腕は白く、少女のよつに纖細だ。

「ジイン、助けて……つてー！」

抱きつづよつて、ジインに手を伸ばし。

そして、一瞬動きを止め。

ついで、少年は顔から血の氣を失った。

「寝てるし……」

その声は絶望を色濃く宿したまま、雑踏に溶けて消えていった。

不吉な血の香りは、この少年から漂つてくるようだつた。顔色を青くしたまま、少年はいまだすやすと眠り続けるジーンの胸倉を両手でつかみあげる。

「ジーン、起きてー起きていば、ねえー！」

泣きそうな声を上げて少年はジーンをゆすり続けるが、ジーンは目覚める気配さえ見せはしない。

「ジーン、貴方はなんでいつも重要な場面で寝ているんだよ！ 嫌がらせだらうーぼくを困らせたいと思つてるんだらうー起きてよ、ジーン！ ジーンひてばー！！！」

血の香がわずかに増した気がした。

見れば、少年の衣に赤いしみが出来ている。わずかに破れ、その間から傷が覗いていた。そうたいした傷ではなさそうだったが、それにしても、こんな美少女と紛つばかりの少年が刀傷とは物騒この上ない。

「そう、物騒な刀傷　この少年にはあまりにも不似合いな。

「ねえ。大丈夫？」

「じゃあ、これはもしかしたらチャンスかもしれない、と思つ。キアラだつて大地の民だ。

ここにこの子を助けることが出来れば。腕を認められれば。

いつも外見ではねられてしまつ、守護者や傭兵になれるかもしれ

ない。

「……あなたはだれ？」

声をかければ、少年はようやっと。キアラの存在に気づいたようだつた。

「大地の民？ジインの知り合い？」

ジインから手を離し、つとキアラのほうに歩み寄る。
ぐらりとバランスを崩したジインの体が木箱からずり落ちるが、少年はまるで気に止めなかつた。

というか、ジインはそくなつてさえ目覚める様子を見せない。

「知り合いつて言つか……話してる途中にちょっと待つて寝ちゃつて」

「ジインはいつもそうだよ。巫覗ですらないのに、神をその身に宿してるんだから、しょうがないっていついたらしようがないんだけどね」

巫覗？

巫覗つていつたら、神様を降ろしちゃつたりして、託宣をさづけるとかいう、あれ？

キアラは思わず口許をひきつらせたが、幸いといつかなんというか、少年がそれに気づく様子はない。

大地の民は戦闘能力にこそ長けているが、基本的に呪術的なものや神がかり的なもの、一種超常的なものにはまるで縁がない種族なのである。

必要に迫られて、呪医の勉学に励み、薬草学に長けた者となるものがいることはいるが、そういう人たちにしたところで、呪医らしいところといえばせいぜいが薬を調合したり病人の診察をしたりする程度で、人間やエルフなどの呪医のように特殊な力を持

つわけではないのである。

この人、間違いなく大地の民だよね？

それなのに、巫観的なことをやつちやうの？

それって……なんだろう、すゞく面倒くさい予感がする！

キアラはそう認識した瞬間、ジインに助けを求めたことを後悔した。

どうしようもなく、厄介」とのにおいがする。
そんな面倒なことには関わりあいたくない。

目の前で途方に暮れた様子の少年をみつめる。

とりあえずこの少年に雇つてもらえば、ジインとこれ以上関わらなくてもすむんじやないんだろうか。

ペロリ、と軽く唇をなめて、キアラは少年に向き直った。

「ねえ、貴女、大地の民でしょ？」

けれど、キアラが口を開くより前に、少年がおずおずとそういう切り出した。

「大地の民は、戦闘に長けた種族だつて習つたことがある。少しの間、ぼくを守つてくれませんか」

まったく、願つてもない展開だと、そう思った。

「私でいいなら、喜んで」「こいつと笑つてうなずくと、少年はほつとしたような顔つきになった。

「ほくは、マーリ。詳しことはこえませんが、今ちょっと追われていて。たぶん……今すぐにお詫頂戴とかそういう物騒な展開にはならないと思うんだけど……だからといって、捕まるわけにはいかなくて。ジョンとはちょっとしたオトモダチって感じかなあ。上りしへお願いします」

やわらかそうな金色の髪が、通りを渡る風にふわふわと揺れる。

いかにも硬そつな自分の砂色の髪とは随分な違いだ。

ちよつとうりやましい」というか。

神様って生き物は不公平だと思ひ。

「私は、キアラ」

あにれまやあねさまよつばさつと華奢で傭兵向きではなに体つき。けれど、柔らかでふわふわしてこるわけでもなく、中途半端な自分で、容姿。

「とりあえず、追われてるんだつたら、これを被つて? その髪の毛は田立つかり」

血のことを気になつたけれど、追われているのなら、先に少しでも距離をとるべきだつ。

といあえず少年マーリの田立つ金色の髪を隠してしまつべく、キ

アラは眠つていて、ジーンからワードツキのロープを引っ張った。

その拍子にジーンがさうに木箱からずり落ちて、ついでに壁に頭をぶつけた。

起きる気配はなかつたので、とりあえずはいいのだらつ。

ロープには、ジーンが焚き染めているのか、やせしく爽やかな香りが染み付いてくるようだつた。

世界樹に見守られているよつた心持になつて、ほんの少し心強い。

そつとその香りを吸い込んで、少しばかり不安げなマーリにこつこつと笑つて見せた。

「だいじょうぶ。私、大地の民ではそんなに強くないナビ、ニンゲンよりは強いと思うから」

ふわりとロープを広げて、マーリを抱き込む。

小柄なマーリに、大柄なジーンのロープはかなり大きによつて、裾を引きずつてしまつたが。

とりあえず腰の辺りをベルトで止めて、無理やりに丈を調節した。

「こいつ

マーリは王都に詳しそうだつたから、先導はまかせた。追つてくる二ングンがないかどうか、警戒しながら。キアラもその後に続く。

「マーリ、逃げる先は決まつていいの?」

4つの通りを過ぎ、6つ目の裏道を抜けたあたりで、キアラは困ったようにそう聞いた。

マーリの足取りは頼りなく、右に逃げた後、左に戻り、結局は逃げるのに遠回りをしただけだったということが何度もあつたためだ。とてもではないが、行き先が決まっているようには見えない。

キアラの問いに、マーリは泣きそうな顔つきでゆっくりとかぶりを振った。

「逃げなくちゃいけないことはわかつてるんです。でも、どこに逃げたらいいのかわからない」

たぶん、年齢よりは大人びた顔つきなのだと思う。
知的な夏の空の色の瞳は、悲しみを帯びてキアラをみつめた。

「誰を信用していいのかもわからない。ジインは群れるのが嫌いな人だから、大丈夫だと思ったんだけど。あとはなにもわからないんだ」

マーリは今にもその場に座り込んでしまいそうだった。
まるで群れからはぐれて途方に暮れている、羊の子どもみたいに。
切なそうにしょんぼりと肩を落としている。

「おど、ひとつね。

「えつと……」

そんなマーリをみつめながら、キアラは軽く頬をかいた。
直接相対したことがない敵がいる場合。
まず、しないといけないことはなんだったか。

「ねえ、マーリ。誰に追われているの？」

すべきことは、常にひとつ。

情報を集める」と。

だが、いつ。どこでなんのため。そのための手段をもって。

ゆづくつと聞えれば、マーリのまなざしは瞬間泳いだ。
隠したいことがある顔つきだ。

「……言えることだけでもいいんだけど、私は向もじりなすぎるのか
」

「

たとえば、そう。

森の中で魔獣に近くわした時に。

その魔獣が何を苦手とするのか、何を好むのか。それを知っているだけで、生存確率はぐんとはねあがる。
情報は、あければあとまづがいい。

敵よく知ること。

己にできることとできぬことを、きちんと理解すること。

それがすべての基本なのだから。

本来ならはず、雇い主との間に、強固な信頼関係も育つたはずがいい。

けれど、自分とマーリの間にそんなものがなにかは、やれどわかっている。

たまたま、その場に居合わせた人物。それ以上でも、それ以下でもなくて。たまたまあ互いにその相手に、ほんのりひとつ利用価値を見出したに過ぎないのだから。

マーリは少しばかり迷っているようだつた。
けれど、ほどなく腹を決めたようだ。
夏色の青い瞳をこちらに向けた。

「おじさん、なんだ。追つて来てるのせ、おじさんの私」

「おじさん？」

「うん。おじさんは、ぼくが邪魔なんだ。だから、ぼくをこないことにしちゃおつとしてるんだ。町の中で何かをされることはないと想ひけど、つかまつたら、ぼくはたぶん。殺されてしまつ

やう語ったマーリの口調は淡々としていて、とくに悲壮感も何も
ない。

諦めている、というのか、なんというのか。
つまくはいえないけれど、そのことについて、格別な悲壮感なんかは抱いてはいないようだつた。

「ぼくの姉さんが神殿で巫女をしているんだ。だから、姉さんのところに行こうと思ったんだけど、だめだつた。神殿はすでにおじさんが掌握したあとだつたんだ」

大人びた口調で、マーリはさらに言葉を継いだ。

小難しい言葉を使っても、マーリはまだ幼いのに。

その伸びをした様子はなんとなく切なくて、キアラは思わず眉根を寄せた。

とおど、ふたつめ。

「頼れる人は、いないってことか
「うん。姉さんも多分、動ける状況じゃないと思ひ」

まだこんなにも幼いのに。

大人びた口を利く、この子を哀れだと思う。
けれど、キアラはあえてそこには触れなかつた。
感傷にふけつている暇はないのだ。

現状を嘆くのも、感傷にふけるのも、事後策を講じるのも。
安全な場所で落ち着いてから考えればいいことだ。
すべては命あつての物種なのだから。

「ジインってなにしてる人なの？」

行き先不明、敵の人数等も不明。

つかまつた場合の処遇も、最悪命に関わる。

どうしたものか、とキアラは少しばかり爪をかんだ。
とりあえず物盗りや「ロロツキから、対象者を護るのとはわけが違
う。

先立つものにも大いに不安があるし、なにより自分はまだここ
地理にさえ詳しくはない。

ジインをあの場に見捨ててくるのではなかつたと、今更ながらに
思う。

大地の民なのに巫覗、といつそのキーワードで無駄にうろたえて
しまつたらしい。

冷静に考えれば、この場で一番、この状況を乗り切る術を持つて

「こののはジョンだったろう。

「ジョンは……」

「己の浅慮を悔いても、すべては今更である。

ひとつと諦めて……もとい。現状を認識し、容認して。

話題を変えたキアラの問いに応えるべく、マーリは口を開き、言葉を探しあぐねて再び口を開じた。

「……なにしてる人だらう

そうして、ぽつりとそつ噺く。

え、とキアラもまた言葉をなくした。

「知り合いなんでしょう？」

「うん」

「ジョンって秘密主義な人？」

言葉を重ねると、マーリは困惑したようにかぶりを振った。

「その身に神を宿してこらなんて、超重要国家機密並みの秘密をぽろっとこぼしちゃうくらいだから、秘密主義ではないと思つ

それはたしかに。

「どうか。本当に、神様が宿った人なの？」

「何かの弾みでひろっちゃつた、とか言ってたけど

なんなんだろ？

神様って言うものは、落ちた！的ノリで拾えちゃつたりするも

のだつただろうか。

犬猫の類ではあるまいし。

「……冗談じやないの？」

さらに突っ込んでみると、マーリは複雑な顔つきで考え込んだ。

「でも、あのいつでもどこでも突然寝る体质つて言つのは、尋常じやないとと思うんだ」

「いつでもどこでも寝る体质つて言つのが、そもそも言い訳だとか」

それは、ない話ではないと思つ。

もしかしたら、真実に「アミスくら」はしていたかも知れない。けれど、悲しいかな。

キアラは順番を間違えた。

こんな呑気な話は、安全地域でこそ話すべきことだつたと思つ。

はつと気がついてキアラが顔を上げたときには。

遠巻きにこちらを窺う気配が、ひとつふたつ、とんでいつつむつつ。

殺意とまではいかないが、敵意とこゝが、「見られて」いる。

「ぼく、騙されてたのか……？」

「黙つて、マーリ」

真剣に落ち込みかけたマーリを制して、キアラはあたりの気配を探つてみる。

本当につかつだった。
囲まれた。

だから、自分はいつまでたっても、未熟で。
兄や姉のようになれないのだと、ほんのすこしづかれて嫌悪に
おちいる。

裏通りを走つて抜けた先にある、小さな広場。
大通りを外れているから、あまり人も多くなく。
残念ながら、人ごみにまぎれて逃げるといつ、王道は使えそうに
もない。

これって、もしかしなくともピンチ？

王都に出てきて、まだ半日。
その間にこんな状況におちいるなんて、王都はなんて怖いところ
なのだわ。

じおと、ふたつめ。（後書き）

次回新章です。

ひとつめ。

一見して、平和な町並みだった。

裏道まできちんと整備された石畳の道。

おまけに大通りでもないのに、小さく開けた場所が作られていて、花が植えられたりベンチが置かれたりしている。

大通りほど多くはないが、そこそこある人通り。

その間にまぎれるようにして、ちらほらと。

囲むように取り巻いた、不穏な気配。

「とりあえず、エニーを逃げよつと思つ」

「うん」

声を潜めてそのまま言ふると、マーリは素直にうなずいた。

「私は地理に詳しくないんだけど、エニーが一番安全だと思つ？」

問えば、マーリは無言のままつづみいた。

わからない。なるほど。

「それなら、王都から離れるつて言つのはアリなの？離れて身を隠す」

「あんまり長いことだとまずいと思つ」

条件付での、許可。

まあこのまま、右も左もわからない王都で迷子になりながら逃げるよりは、いささか先が見えた選択肢だと思つ。

「それなら、マーリ。フードをしつかり被つてね、私が追っ手をひきつけている間に、大きい方の王都を出る門にいつて」

「大きい方？ 小さい方の門じゃなくて？」

「人が多いほうが、紛れ込めるかなって思つて。私は大地の民だか

ら、マーリの匂いを追える。だから、頑張って本氣で隠れてて。絶対見つけて合流するから」「うん

マーリの頭をぽふぽふとなでれば、幼げな顔が少しばかりくしゃみとした。

「いい？ 今から、あっちの通りに走るわよ」
キアラが示したのは、細く長く水路沿いに走る一本道だ。
キアラたちがいる場所から走りこむほかには、しばらく合流していく道はなさそうだ。

「私が道をふさいで追っ手を止めるわ。マーリは一生懸命走って逃げるふりをする」

「ふり？」

「そう、隠れられる場所があつたら、そこに隠れて。私が道をふさぎつつ逃げながらマーリの後を追つていいくふりをするから、私と追っ手が通り過ぎてから、そこの場所からでて約束の場所に行つてちょうだい。わかった？」

退却を偽装する。

難しい技術ではあるが、相手が自分たちを女子供だと侮ってくれれば成功するに違いない。

大地の民には珍しいこの華奢な外見も、きっと相手に侮りを生んでくれるだろう。

「日が沈んでから、落ち合いましょう。あなたの幸運を世界樹に祈るわ」

大地の民の決まり文句を口にしてから、キアラはマーリの背をぽんぽんと叩いた。

「いくわよ」

だいじょうぶなのか、とマーリの視線が問つている。

実を言えば、自信はあまりない。

けれど、自信がないからやらなくていいことにはならない。

やるからには、最善を尽くす。
ほかに、道はないのだ。

マーリを安心させるように微笑んで見せてから、キアラは建物の壁沿いに積み上げてあつた樽を通りに向かつて思い切り蹴飛ばした。ちゃんと中身が入つていたようで、結構重い。

少し無理をしたが、そのまま蹴りきつてしまつと、高く積み上げてあつた樽はぐらりと揺れて、地面へ「ロロロロ」転がった。中身がこぼれることも予想したが、思ったよりも樽は頑丈だったようだ。

重さのせいで勢いも増し、通行人めがけてなだれしていく。
うわあ、とあちこちで悲鳴が上がった。

重い樽は結構な凶器になるようで、みんな結構真剣に逃げている。反射神経が鈍そうな幼児や、思つたように動くことが出来ない年配の人間がいなかつたことにいささかの安堵を覚えた。

ふたつめ。

人の波が、くずれる。

乱れて、ざわめく。

追っ手たちが崩れる樽の山に氣を取られたその一瞬に、キアラはマーリを抱えて水路沿いの通路に駆け込んだ。

一瞬遅れて。

ばらばらと追いかけてくる人影が、三三四四……ざつと六つ。

「行きなさい、マーリ！」

背後にマーリを逃がし、キアラは追っ手の前に立ちふさがった。背中に負っていた大剣をはずし、布にくるんだまま、両手で柄を支えたまま地面につく。

大地の民が用いる大剣が、街中でふりまわすには物騒すぎることは百も承知だ。

マーリの軽い足音が、ぱたぱたと遠ざかっていくのを、耳だけを動かして確かめる。

視線は追っ手に据えたまま、動かすことはない。

これ、ちょっと危なくない？

思わずそんな感想を抱いたものの、表情には出さずに瞳を眇めて追っ手を見やる。

挑発するときのあねさまを真似てみたのだが、果たしてうまくいったかどうか。

心持ち顎を上げるのがポイントなのよ！と確かあねさまは言つていたような気がする。

大地の民の戦闘能力が高いのは周知の事実だから、たとえ力量が

たりないと自分で悟つても、相手を威嚇することとびびらせようと
いう作戦なのだと。びびつて引いてくれれば御の字。もし引かな
くとも、恐れを呼び起しきことが出来れば、数割は力をそぐことが
出来るらしー。

だけど、あなさま。

どう鼎原目に見積もつても、この力量の傭兵6人相手はきついで
す……

ていうか、ムリだから！――！

互角に戦えるのは一人まで。

三人だと、負けないよう立ち回るのがなんとか。
それ以上だと、死なないように逃げられればいいなーという感じ
だろうか。

「邪魔をするのか、大地の民よ」

リーダー格ひしき髭面の男が一步前に歩み出る。

マーリはもう、隠れただろうか。

これは逃げるふりじゃなくて、本格的に逃げないとまずやうな
だけれど。

うまく隠れることが出来ただろうか。

内心でマーリの身を案じつつ、キアラはふんと鼻を鳴らして見せ
た。

「邪魔も何もないわ。あなたみたいないい年したおっちゃんが、あ
んな小さくていとけない子供を追い回すなんて悪趣味が過ぎるわよ
「悪趣味だらうがなんだらうが、仕事は仕事だ。受けたからには全
力で当たるのが本職だ」

「ところは、自分で悪趣味だつて思つたるところね
くす、とわざと瘤るよつにキアラは笑う。

「私たちの剣は、弱者を虐げるためのものじゃないわ。剣を持つものとして恥を知つたらどうなの。本職なら本職らしく、強者と戦う剣を持ちなさい」

まあ、キレイことで世の中渡つていけないらしいけどね。

あねやあにが、自分にそつ諭したあとでこつも自嘲的に咳く言葉を胸の中で呟いてみる。

雇われて剣を振るう以上、意に染まぬ仕事もあるし、時には誇りを殺して汚れ仕事を引き受けることもある。やべ、マーリのような幼子の命を奪う」とねえ。時にはあるのだひつ。

「ふくに仕事を受けたこともないらしい新米の傭兵か。いつまでそのきれい」とを通せるかみものだな」

吐き捨てるように返した髭面が口許を歪める。
どうやらキアラが思つていたよりも、まつとつな傭兵だったらしい。

自嘲している汚さを衝かれて、その頬に自嘲がもれていった。

「金をもらつた以上、どんな仕事でも全うすべきだ、幼きものその幼さに免じて、素直に退くなら見逃してやるつ。下手な義侠心は怪我のもとだぞ」

髭面はたぶん、ちよつとばかり格好をつけた。

その言葉は確かに正しくて、そんなことはキアラにだつてわかっている。

髭面が思つてこゆよりも、大地の民ははるかに傭兵家業に精を出

す一族なのだ。

時には雇われ主がちがうがために、兄弟ですら剣を交えるほどだ。

キアラはにつこりとくちびるを笑みの形にひいた。
うまい具合に髪面が乗ってくれたおかげでいい時間稼ぎが出来た
と思つ。

後ろの傭兵たちが焦れて攻撃してこない間に、次の段階に進むと
しよう。

みつづめ。

「私も一応雇われの身なので。はいそーですか、というわけにはいかないのよ」

くちびるをぺろりと舐めて、布にくるんだまま地面につけていた剣先をわずかに浮かせる。

兄さまや姉さまたちなら、片手であつかえるこの大剣だが、キアラの手には少しばかり大きい。見た目に比例して重量もあるこの剣を、キアラはいつも、身体で持つて振るう。

「よつと……せいっ！」

少し、多少、いやかなり？

間抜けとも思える掛け声をかけて、キアラは大剣をそのまま上段に振りかぶった。

そしてそのまま、重力に引かれて落ちる剣の勢いに任せて振り下ろす のだが。

ほんのわずかに加減をして、気づかれない程度に勢いを殺した。本来であれば、地面を割る勢いで振り下ろされるはずの大地の大剣は、軽く地面をえぐつただけで止まる。

うまく加減、出来るといいなあ

6人相手はさすがにしんどい、が。

マーリのこともあるし、ここはあまり負傷せず、かつ。不自然でないように戦略的撤退をしたい。

できれば、あまりにも力量の差が歴然としているので逃げました！的状況を演出したいところである。

あまりこの場で命を懸けました！的なやり取りはしたくなかった。敵の勢力がこの6人だけとは限らないのである。余力はなるべく残しておきたい。

ここで死力をつくしたとしても、マーリを護れなければ意味がないのだ。

や！と氣合の声をかけて、今度は左から右になぎ払う。

ステップを踏んで後退した髭面に迫り、剣の軌道を手首の返しで今度は右斜め上段から左下へ斬り下ろした。

まずい、と思ったのは、基本的な動きであったにもかかわらず、なぜか不意を衝かれたふうの髭面が応戦しようと剣戟を仕掛けてきたからだ。

けれど、髭面の攻撃よりも、キアラの斬り下ろしのほうがわずかにはやかつた。

野にある猛獸妖獸魔獸の、鋼のような毛皮さえ重さと勢いに任せて一刀両断にする大剣である。

一般的な傭兵の細剣が、その大剣の攻撃に耐えられるはずもない。

だけど、だけど止まらないのよ！！！

戦略的撤退をもぐらむキアラとしては、ここで敵の戦力をそぐのは歓迎しない。

もし万が一、チキンな心臓の傭兵なら、リーダー格の髭面の剣を折られたことで、逆上して破れかぶれで向かってくるかもしけない。

やっぱ、と思ったときにはもう遅かった。

キアラの大剣は、軌道上に無造作に置かれた髭面の剣を、あまりにあっけなく碎いたのである。

ぽかん、と髭面が。後ろの傭兵たちが、澄んだ音を立てて飛んでいく、折れた剣先を目で追つた。

ここでキアラにとつて、嬉しい誤算だったのは、まだマジメな傭兵が一人混じっていたことである。

ぽかんと剣先を追つた髭面と4人の傭兵たちを尻目に、マジメに応戦してきた傭兵が約一名。

キアラの剣先が地面をえぐつたところで、冷静に大剣の軌道外のところを狙つてきたのだ。

とつさに頭を後ろにそらしたキアラの鼻先を、冷たい銀の輝きがかすめていく。

大剣を振り上げて応戦するキアラの攻撃を、決して真っ向から受け止めることはせず、うまく流してさらに仕掛けてくる。

大剣と細剣の立会いのお手本のような攻防だ。

2・3合剣を合わせていると、やっとわれに返つたほかの傭兵たちも、慌てたようにこの攻防に参加してくる。

キアラの戦略的撤退作戦は、マジメな傭兵のおかげで、うまい具合にいきそうな雰囲気だった。

よつしゅ。

よし、と心の中で頷いて、キアラは数歩分を後ろに飛び下がった。そろそろちよどいい頃合だろ？ キアラ自身も、相手方の傭兵たちも、お互に息が上がっている。なるべく息を整えるべく、深い呼吸を心がけながら、キアラはじりじりと後退った

薄い切り傷ができるいるのか、腕も頬も少しばかり痛痒いような気がした。

けれど、今、確かめている時間はない。

お互に見合って、息をつめて。相手の隙を窺つて。

それはほんの一瞬だった。

原因はわからない。

ただ、お互に深く息を吸える時間があつた、それだけだ。

相手は呼吸を整えるために息を吸い、キアラはそのわずかな時間を退却にあてた。

片手に大剣をぶら下げたまま、視線は傭兵たちに据えたまま、横向けに後退していく。

少し距離を稼げれば、背を向けて走り、追いつかれそうになればまた応戦する。

それをくりかえし、くりかえし。

幾度繰り返したかわからぬうちに、マーリの匂いが濃くするところを通り過ぎた。

時間的には、そう長い間ではなかつたかもしない。

追つ手がマーリに気づかぬことを確かめ、安堵し。

どこかで剣を調達したらしい髭面と幾度めかに剣を合わせた瞬間
それは来た。

ぐらりと揺れた視界。

手足から力が抜け、大剣ががらんと鐘のような音を立てて地面に転がる。

「なに?」

吉川には、よくは立っていないとかできないのだと分の状態を理解した。

「えへへ、やこしたか」

悪役ながらの台詞を髪面が呟いたが、いかんせん上がりまくつた息の合間に吐き出された言葉ではイマイチ迫力がないと思つ。

「大地の民はバカみたいな体力と、怪力と、毒草への耐性を持つて
るつて聞いてたが本当だつたんだな」

もしかすると、傭兵の中の誰かが、剣に毒液でもぬつていたのか
かもしれない。

綺麗ごとばかりが大好きな守士とは違つて、傭兵は目的のために手段を選ばない人種が多いのだ。

全身の痺れと、動悸息切れめまい。

そんな症状が出る毒草は数種類あるが、自分では特定も出来なか
た。

もつとも、特定できたところです。

毒消し草などもつてきていはないのだけれど。

油断した、とわずかに自嘲もしてみたり。

深く息を吐き出して、揺れる視界の中で、髪面をこりみつけた。

傷つけられたのは自分の力量不足が問題で。そこに毒草が塗りつけてあつたからといって卑怯だとかなんだとか言つつもりは毛頭ないし。命乞いをするつもりもない。

大地の民らしへ。誇り高く最期を迎えたいくと思ひばかりだ。

ただ、気になるのはマーリのこと。

あの子は無事に逃げられるだろうか。
さつき見捨ててきたジーンと、うまく合流して逃げられればいいのだけれど。

いつつめ。

膝から力が抜けて、もうたつて「」とさえも出来ない。キアラが震える膝をついに地面につこうとしたとき、横合いからのびてきた力強い腕がキアラの腰をさらつた。視界の端をかすめた、二の腕の複雑な紋様。心地よく香つた、世界樹のにおい。

「なにをしているんだ、キアラ」

背中が人肌にぬくい。

腰を抱えられているせいか、からかうような低い聲音が、体の底に響く。

「」は森でもなければ、仲間内でやつてる遊びでもないぞ。失敗すれば、死、あるのみだ

声が近い。

あたたかな息が、耳にかかるて、なんだか背中がぞくぞくする。

「わかつてゐる、けど」

自分の声は、ちゃんと言葉になつてゐるのだろうか。

舌が痺れて、なんだかひどくしゃべりにくい。

「わかつてゐないだろ？ 手段を選ぶなよ。命を奪え」

森から遠く離れていても、王都でも。大地の民は、やはり大地の民で。知り合つたばかりだとして、大地の民の兄らしい性質は万国共通らしい。

兄や姉たちが言いそなことをジインも淡々と諭すようにいった。肯くかわりにキアラが息をついた後、ジイン、と呟くようにくちびるを動かせば。

なんだと低く声が返った。

「マーリは……？」

「その辺りにいるんじゃないのか」

「あの子、を」

「お前のほうが現在危機に面していると思うんだけどねえ」

マーリを頼む、といいたかったのに。

ジインの返答は素っ気なかつた。

風向きが変わったのか、マーリが遠く離れたのか。
マーリの匂いはもうしない。

身体に力が入らなくて、だらんとジインの腕に抱えられたままだらけていると、ジインが呆れたように息を吐くのがわかつた。

「おい、あの前向きすぎる質問はどうしたの？」

髭面を始めとし、傭兵の面々をまるで無視したその様子で、ジインはそのあたりに転がっていた木箱にキアラを座させてくれた。ほんの少し眉尻を下げて困ったように聞いてくる。

何の話だと視線で問えば。

「選択は二択。もとから助ける気なのか、今助ける気になつたのかつてあれだよ」

ぽふぽふと大きな手でキアラの髪をかき回し。

ジインは空いた手で地面に転がっていたキアラの大変な大剣を拾い上げた。

「答えは起きてからって言つただろ?」

キアラには大きすぎるその剣も、ジインが持つとちょうどいい大きさに見える。ならすよつに一振りしたあと、ジインは剣を片手で

構えて、いさか横柄に傭兵たちを見渡した。

むづつめ。

「おれのかわいい妹になんてことをしてくれたんだ。もちろんそれなりの覚悟は出来るよな？」

特に脅すふうでもなく。

平板な様子でジインはそう言った。

けれどジインが大剣を持つと、やはり迫力が違うらしい。

傭兵たちは圧されるようにじりじりと後退し、髭面が「妹だと？」

！』と情けない声を上げた。

「眠り男に、妹がいるなんて話は聞かないぞ？！」

「残念だつたなあ。大地の民に、妹がないなんてことはありえないんだよ」

傭兵たちの反応を見るに、実はジインは有名人なのかもしけないと、ちらりと思つ。

「大地の民は種族全体が家族のようなものだからな。血がつながつてなくとも妹なんだよ」

氣負うふうもなく、ジインは一步前に歩み出る。

何気なくひとふりした大剣が、風を斬つて唸つた瞬間。傭兵たちの剣が弾けて飛んだ。

「おれはキアラと違つて手加減はしないよ？面倒だから宣告しながら、剣をもう一閃。

キアラが使つような派手な動きも体術もないけれど。

ジインは確かに剣の一振り一振りで、確實に相手の戦力をそいでいくらしい。

ただ手加減はしないといいながら、一撃で殺してしまわないあた

りは、優しいと言つのかなぶつてゐるといふのか、殺すといいながら後始末をめんどくさがつてゐるといふのか。

ジインは正確に傭兵たちの剣を折り、鎧を切り落とし。

やがて、その恐怖に耐え切れなくなつた傭兵たちがばらばらと逃げていくのを、ジインの背中越しにキアラはぼんやりと見送つた。意識をなくしてゐるわけではないが、毒が回ってきたのか思考の方までしびれてきたような気がする。

特に退散していつた傭兵たちの後を追つでもなく、ジインはその背を見送り。

ひちらに引き返していくと、キアラの頬や腕にできた小さな傷を検分するように手を添えてじつとみつめた。

「傷はそう、深くないねえ。やっぱり毒か。まあ、きついのではなくてよかつたけどさ」

視界に映るジインが、わずかに口の端を曲げる。

「ジ、ン
「どしたよ？」

ジインの温かい指先が頬の傷をなぞつた。

「……女の子なのに、顔に傷なんか作っちゃダメじゃないか。いくら大地の民が戦いの民だから少々の傷は気にしないといつてもセ。ないに越したことないんだよ？」

思考が散漫で、言葉を紡ぐこともできないでいる。
沈黙を埋めるようにジインはそんなことをいった。

人間とは違う、大地の民の暖かさ。初対面でも、ずっと親しんで

いたよ。なつかしさ。

王都にきてから、ずっと張り詰めていた心がこんなところのこぼれていくよ。

それが心地よくて、じつとジインを視界に納めている。なぜだかジインの整った顔が視界いっぱいにひろがった。顔を近づけてきたのだと、理解したのは一瞬あと。何のためにと疑問を覚えたときには。

あたたかくてしめたなにかが、頬に傷にふれていた。

「動かないの。おれ、今薬もってないんだからわ」

消毒のかわりだとそういって、ジインが傷口を舐めていく。ぴりぴりとした痛みと、舌の熱さと、ぞくぞくする背中と。

そういうえば、転んで怪我をした昔。

剣の稽古をしている途中に負った傷。

近くにいた兄や姉たちが、よく傷を舐めてくれたと思う。

大地の民の唾液は傷の治りを促し、毒を清めると、昔からよく言われている、のだけれど。

「ジイ、ン……」

ジインは大地の民の、会つたばかりだけれども兄の一人で。

それなのに、背筋を変な感触が駆け抜ける。

「じい、動くな。腕はともかく、顔は自分で舐めらんないでしょ？」

どれだけ、時間は過ぎたのだろう。

ぞくぞくするその感触と熱さをひたすらこらえて。

ほんやつとした思考がよつやく動きを取り戻していく。「……」
もつともな理由を告げられた頬の傷はもちろん、腕の傷もきれい
にジーンに消毒されたあとだった。

「どうあれすれ、質問に答へると」

ペニンと歯を舐めて、ジーンが口ひげを見下りしてくる。

「おれは王都で天涯孤独の身の上とこいつとになつてこるし、もつ
森に戻ることもないだらうけど、一応大地の底の端くれだし。おま
えを助けるのもやぶさかじやないと思つよ。ひまだし」

なんて回つぐどに言い方をするのだと。
助けてもらひつ身であつながら、キアラは思った。

ななつめ。

「さて、と

助けるといつ趣向をキアラに伝えたジインは、もしかすると少し満足したのかもしれない。

わざかに顎を引くと、端正な顔にキレイな笑みを浮かべて見せた。キアラは一瞬それにみとれ。ありがとうと告げる機会を逸した。ぽふぽふと頭をなでたジインが、立ち上がるついでに そう、本当にそんないくつか自然な成り行きでキアラのことを抱き上げたせいで。

ふわり、と頼りない浮遊感に襲われて、キアラは田を見張る。

「え、ええええっ？！」

浮遊感は一瞬。

ジインの腕に座らされるような形で、キアラにはすべてに安定感がもたらされた。

自分の足が地面につかない頼りなさは、がつしつとしたジインの体躯によって代替される。

「なになになに？！」

「おとなしくしてなこと、肩に抱こじやうよ~

「や、やひじやなくて~」

幼子を父親が抱き上げるようなものだと、頭のすみでは理解しても、感情が追いつかない。

傷を舐められることも、抱き上げられることも。

昔はよくあつたが、成人に近づくにつれ兄も姉もしなくなつてき

たのだから。

久々の出来事に、ついでにジインをほとんど知らないといひことに重なつて、心臓がなんだかばくばく跳ねまくつている。

「あの、ジイン？」

最初こそ、ジインを兄さまと呼び、言葉も丁寧に使っていたが。そんな丁寧さは今はどこへやらだ。

話の途中で寝てしまつたジインに対する苛立ちが最初はそうさせで、今は動搖のためにぶつ飛んでいる。もっとも、キアラが自分のそうした心の動きを整理できるのはもう少しあとになるのだけれど。

「どうした？」

「なんで、抱っこしてるわけ？」

「なんでって」

片手でキアラの体重を支えるジインは、あいた右手でキアラの大剣を己の背中へ担いだ。

「今、歩けないだろ？」「

「ちょっと待つてさえくれれば……」

そうきつい毒ではなかつたみたいだし、今はもう舌の痺れも薄れてきている。

「おれが動けるのに、わざわざこんなところまで呆けている必要もないじゃないか。大地の民が助けて護ると決めたなら、それは最後まで貫かれてしかるべきだ。そうだろ？」

「それはそうだけど……」

キアラだつて、一度助けると決めたら最後まで頑張る。自分の命だつていとわない。己の決意と誓いをなによりも優先する大地の民だから。

けれど。

「私だって、大地の民なんだから。マーリを護るつて決めたし、私がジインに助けられてばかりつて言うのは、なんだかちょっと……」
言葉を濁すと、ジインはなぜか不審げな顔をして眉を寄せた。
「おまえさ……いくら財布を失くしたとはいえ。同族の、それも男に女が助けを求める意味をわかつてるとか？」

「…………え？」

困ったから渡りに船とばかりに、通りがかつた同族の年上の兄に助けを求めたのだが。

何か悪かつたのだろうか？

「…………ちょっと、失礼」

ジインに困惑したまなざしを向けると、ジインは眉を寄せたまま一瞬動きを止め。

空いているほつの手で、背中の半ばまで伸ばしたキアラの金茶色の髪を慎重な手つきでそっと横に避けた。

「え？ なになに？ ? ?」

キアラはジインの腕に腰をかけるような形で抱き上げられていたため、ジインの肩先に身体を押し付けられるような格好になってしまふ。

驚いたような声を上げたが、ジインは何か目的があるらしく。そのままくいっと衣服の襟首をひつぱつた。

「うひゃ」

おもわず変な声があがつたのは本気で驚いたためだ。

「ジイン？！」

「いや……本当に成人だよな？と思つても……」

「失礼ね！ちゃんと成人の儀だつて済ませたわよ！」

噛み付くようにキアラは抗議したがジインの表情は複雑なままだ。だが、その行動の意味はちゃんと理解した。

成人の儀で男は二の腕に自分で刺青を彫るが、女は首の後ろに、一番親しい姉に彫つてもらうのが一般的なのだ。

どうやらジインは、何らかの理由があつて、キアラが本当に成人しているのかを確かめたかったらしい。

「まいいいか

首をひねりながらも、ジインは無理やりに自分を納得させたらしかつた。

理由はわからなかつたが、ジインに説明するつもりはないらしい。「とりあえず、おれ、寝足りないんだよね。マーリはつまく逃げたみたいだし、しばらくはほつとっても大丈夫だらう。」

先ほど話の途中で眠つてくれただけではまだ足りないらしい。

あふ、と緊張感のないあくびをひとつして、ジインは確かに足取りで、キアラが傭兵たちと戦いながら逃げてきた道を引き返し始めた。

せひつめ。

「ところで、マーリは逃げたみたいだけ、待ち合はせはしているのか？」

ジインがそう問うたのは、水路沿いの道に飛び込んだ例の裏通りに差し掛かったときだつた。

キアラが力任せに蹴飛ばした重い樽を片付けている屈強な男たちが数人。きちんと積んでおかなければから小柄な娘がぶつかっただけでなだれるんだと、持ち主らしき髭の親爺が怒鳴り散らして怒つていたのを聞いて、キアラはほんの少し申し訳ない気持ちになつた。

ただ、幸いにも、壊れた樽も怪我人もないらしい。

本当によかつたと胸をなでおろしていれば、ジインがかすかに笑つた。

「よかつたな」
「え、あ。……うん」

ジインの逞しい肩に手を置いてバランスを取つていたキアラは、なんとはなしに恥ずかしくなつてうつむいた。
なんだろう。

ジインのやわしげな黄金色のまなざしが、妙に落ち着かない。

「あ、マーリなんだけど」
そわそわと辺りを見回したキアラは、空氣をかえるべくそつ話を切り出した。

「日が沈んでから、大きい門の辺りで落つけられになつてゐる。匂いを頼りに探すといつてあるわ」

「数刻、間がありそうだな」

ジインはうなずき、目を眇めて太陽の位置を測つた。

「おれたちが今の時間から門の辺りに行けば、日立つてマーリも隠れにくいだろ。宿で少し休むか

「宿？」

「どうせ泊まるわけではないのだ。

「どこか定食屋のようなところで、少し休憩するくらいでいいのではないだろ？」

「おれの起きていた時間がもうあまりないんだ。少し眠らないとまちい」「

キアラの視線に疑問を感じたのか、ジインはそう説明を加えた。

けれどキアラにしてみれば、さらには疑問が深まったようなものだ。起きていた時間、という定義は普通ないように思つ。夜中ならともかく、いまはまだ陽も高いのだ。

神をその身に宿しているひとだから。

ふと、耳によみがえる、マーリの声。

嘘かとも思つたけれど、そもそも大地の民はあまり嘘を好まない。とても精緻な、神代の祈りをその身に刻むほど、大地の民らしいひとならば。そもそも嘘でない可能性のほうが高いのかもしれない。

大地の民に、神が宿るという、その不自然さよりも。ジインが嘘をつけようが。なさそうな気がしたのだ。

「起きてこられた時間って、どうこう」と。

マーリから聞いたことは、知らないふりをして。キアラはジインに質問をぶつけてみた。

当人から聞くほうが間違いが少ないというのもあるが、単に直接その答えを聞いてみたかつただけだった。

答える前に、ジーンは一瞬キアラをみつめた。

きれいなきれいな、黄金色の瞳。細い瞳孔が、まっすぐにキアラに向かられる。

キアラを抱えたまま、すいすいと人波を歩いていきながら、ジーンは短い時間で言葉を吟味しているようだつた。

「キアラは、神代の物語を知っているよな?」

「え、うん

質問の答えとは違つことを問われて、キアラは戸惑いながらもうなずいた。

まず、はじめて。

ただ、虚無うつむがあった。

在つた、というよりも、そこにはなにもなかつた。

けれど。

それを知る存在さえ、いなかつた。

たゆたう、無。

時間さえも流れぬ、なにも存在しえぬ虚無うつむ。

ただ在りつけた、虚無は、ある。はじめて己じという存在を知つた。

空ひなる存在まの、創世はじまつの神、セリヌンティイウスの誕生である。創世の神は、上をみつめ下をみつめ。右と左を見渡したため。天地が生まれて、距離と時間が生まれた。

けれど、創世の神はまだ、ひとりだった。

創世の神は、己が孤独に涙する。

涙はこぼれて、混沌となつた。

涙、其は儚きもの。

いのちは生まれて散つていく、死すべき宿命の神子、ケイオスが生まれた瞬間だった。

ひとりでなくなつたことに、創世の神は喜び、光が生まれ。やがて散りゆくその命、その未来を嘆いて闇が生まれた。昼と夜がうまれて、死すべき宿命の神子から分かれた数多のものが、育つて散つていった。

これが、創世の物語である。

小さいころからだれもが暗記させられた物語だ。

キアラが詠んじてみせると、ジインはかすかにうなずいた。

「この世界は、死すべき宿命の神子そのものだといえる。神子が死すべき宿命をもつよつて、世界もまたいざれ終焉を迎える宿命にある」

「……うん」

一応、習う世界ではそういうことになつていて。

けれど、それを信じている人が世界にどれだけいることか。

しょせん、それは神代の物語なのだ。眞実とは、また違う。

「まあ、いろいろあつたんだけどさ。おれはなぜか、その死すべき宿命の神子の欠片を宿しているんだ」

「はあ……」

ジインはマジメな顔つきで説明をしてくれたが。

神がかり的なものとは一線を画す生粋の大地の民であるキアラと

しては。

ましてや、思いつきり内容を省略されたその答えでは。
どうかうりんな眼差しをジインに向ける」としかできなかつた。

今日はジアン視点での話となります。ふたつみつつ続く予定です。

～Sister・ジアン（前書き）

疑つてゐるなあ……

大地の民にしては、華奢で小柄な金茶色の髪の娘。
黄金色の瞳は、大型の猫科の獣のよつで、かわいらしさと思つ。
先ほど知り合つたばかりのこの娘 キアラは、ひどくうるんな
眼差しをこちらに向けていた。

おれだつてや。

ふつーに、神様がこの身に宿つているんです、と言われたらこうつ
い「反応をすると思うんだ。

いや、もしかしたら、もっとひどい反応をするかもしれない。

「待つて！」

最初に声をかけられたときは、空耳だと思った。

あいにくと王都ディディンに、大地の民の知り合には誰もいない。
普通の知り合いだつてほとんどない。

知り合いといえるのは、なんだか後ろ暗い係累がやたらとありそ
うなのに、美少女のような外見をしたマーリという少年くらいなもの。

あとは知り合いとさえいえないような、顔くらいはじつてるかも
ー?といつような関係ばかりだ。

「待つて、お願ひ。あにさま、待つて！…」

あにさま、という単語に無条件に体が反応した。

誰が決めたか知らないが、大地の民は皆家族、という主義の下。年長の男はみなあにさま、女はあねさまと呼ぶ風習があるのだ。王都にきてからこそ、自分をそんなふうに呼称する相手はいなくなつたが、昔はあにさまとよく呼ばれていたものだ。　その過去が、足を止めさせた。

厄介ごとにには、極力関わりあいたくなかったにもかかわらず、だ。

その瞬間、目深に被っていたローブをつかまれた。

大地の民の外見は、王都で悪目立ちする。その特徴ともいえる獣のような耳を隠すために被っていたローブが、引っ張られた衝撃で、はらりと落ちた。

「……大地の民？」

思わず不審げに娘を見やつてしまつたのは、大地の民としては、あまりに小柄だったせいだ。

本当に成人しているのか？とさえ思ったが、そもそも大地の民は成人しないうちは森から一步も外へ出してはもらえないものだ。よほどの事情がない限りは。

その背に、体格に不似合いに大きな剣を背負っているのも、成人の証かもしれない。

「あにさま」

弾んだ声で、キアラは言った。

キレイな黄金色のまなざしが、期待に溢れてキラキラと輝いている。

なんて無垢な表情だろ？。

その真っ白な笑顔が心に刺さる。なぜか心臓がどくんとばかりに

大きく跳ねた。

「あにわま。私はキアラとこります。お願ひです、助けてください、困つてゐるんです」

逃がすものかとばかりにキアラはロープを握る手に力をこめて、必死な面持ちでそんなことを言った。

はあ、と間が抜けた声を上げてしまったのは、しょうがない。同族の娘に助けを求めるとは思わなかつたせいで。

「ね、あにわま。困つてゐるんです」

確かに、困つてゐるふうではあつた。
けれど、なぜにそこまで、助けてくださいといつのか。
判断を下しかねて、ただ瞬いた。

「おれは、ジインと言つんだが……」

一応名乗りを返しながら、思つたことはただひとつ。
とりあえず、落ち着こう。
それだけだつた。

じょ。～Side・ジョン（前書き）

ジョン視点、一つの話になります。

じゅ。～Side・ジーン

とりあえず大通りで話すような内容ではないだろ？と思ひ、キアラを裏道へと誘導すれば。

お前に警戒心はないのか？！と突っ込みたくなるくらいの素直さで、ぺたぺたとついてきた。

途中、田が釘付けになつていた壁台のよく冷えた果実水を買ってやれば、本当に嬉しそうにこりと笑う。

「J' ve j'veと子供のように果実水をのむキアラをみつめながら、こぼれるのはただ困惑の溜息ばかりだ。

まつたく、森のやつらもビーヴかしている。こんな子供を王都にほうりだすなんて。

まだ同族の自分だつたから救われている部分もあるだろ？が、性質の悪い人買いなんかに目をつけられたら、一体ビーヴするつもりなんだ。

平和な森ではまだ知らないかもしれないが、大地の民は結構な高値で売買される。

扱いとしては、力もある風変わりな奴隸やペットだ。

もつとも、困惑の種はそれだけではない。

「なんで困ってるんだ」

そう聞いてやれば、キアラはなぜかおいしいですと果実水の感想を述べた。

そしてそのあと、キラキラした田で果実水をつつとりとみつめる。お前は困ってるんじゃなかつたのかと少し突っ込みたがつたが、

「つあえずは何も言わずに見守ることにした。

「こんな田舎から来ましたと看板をぶら下げて歩いているような娘、どうせ財布をなくしたとか、因縁をつけられて大金を要求されたとか、道に迷ったとか。

困っていることを予測するのは、はつきりして容易い。それを助けてやることも、まあそう難しいことではない。いくらかお金を貸してやって、なんなら森の近くまで送つてやればいいのだ。

「助けて」と同種族の女に言われたことに比べれば、まったくもつて簡単に解決することである。

大地の民は、強いたぐりに重きを置く一族だ。

強いことが正義だし、ひとに助けを求めることがなんでもうりえない。

女にしても、強いたぐりを第一に考えるし、伴侶を選ぶ時にだって、それはもちろん考慮に入れられる。どんなに気のいい奴だって、弱ければそれだけで『対象外』なのだ。

そんな女が、誰かに助けを求める時。

その誰かは、必ず自分よりも強い、伴侶。もしくは、伴侶候補人間風に言い換えるなら、婚約者にほかならない。特定の相手以外に弱みを見せることは恥なのだ。もし、それ以外の相手に助けを求めるのならば。

それは、伴侶になつてくれといつていよいようなものだといえば、ジインのこの困惑も、理解してもらえるかもしれない。逆に、乞われて手を貸す　助けることは、求婚を受け入れたといふことになる。

人間からしてみれば、馬鹿らしきような風習だと、最近では思つ

けれど。

思うけれど、実際に同種族の女から助けを乞われれば、困惑は深まるばかりだった。

「つゝとりとした顔つきで、キアラは果実水を堪能している。

まだこれが、しつかりとした成人の大地の民の女なら、ここ今まで苦悩しなかつたかもしない。

自分のいつていることははつきりとわかっているだらうし、こちらも対処のしようがある。

けれど、この娘は……

とりあえず、自分がいつてることわかつているか?と胸倉でもつかみあげて問い合わせたい気分だ。

一通りの可能性を検討してみたものの、どうしようもないの一言に及ぶ。

溜息をひとつつき。

ぐらぐらと視界が回っていることに、遅まきながら気がついた。まずいな、と冷静に状況を分析する。

神の欠片を宿すという事実は、思つたよりも身体に負担を強いるらしく、一定時間以上を起きていることができないのだ。

根性とか誠意とか、そういう問題ではなく。

一定の時間を過ぎれば、強制的に眠りがやってくる。

いつもなら、体調を気にしながら行動し、こんな街中で休眠に陥るようなことにはならないようにしているのだが。

自分で思つていたよりも、キアラの登場と助けて発言に動搖していたようだ。

「私、お財布をなくしちゃつて……」

果実水を口に含みながら、よつやつとキアラがそつ切り出したときには、もう眠気が限界までこみ上げてきた。ここまで眠気はもはや暴力だといつも思う。

こらえきれない眠気をあくびで逃がそうとしたら、大あくびの最中にキアラとバッヂリ目があった。

キアラの瞳がたちまちに非難一色に染まる。

「めん、と思つもの。
こればかりはもう、どうしようもないのだ。」

ひとひとつむ。～Side・ジイン

けれど、ようじいにいかもしないと。
キアラの非難の眼差しを受けながら考えた。
この混乱しまくった思考も、一眠りすれば、少しは落ち着くはずだ。

「『じめんね』

あまりにも信じられないところ瞳をキアラがするので、一応謝つてみると、なぜだらう。その表情はさうにきつくなってしまった。もうひとつ、じりえきれないあぐびをする。キアラが何事かを呟いた気がした。

「なんか眠くてさ」

なんかといふよしも、もはや殺人的に眠い。
眠すぎて頭痛さえするし、なんだか吐き気ももよおしてきた。
視界も先ほどよつぐるぐるまわるし、もう既にことこつけつかは気持ち悪かった。

「それで、なんだっけ」

思考が散漫になつて、なにを考えていたかさえわからなくなつそうだ。

とりあえず、田を閉じて、すべての感覚を遮断してしまいたい。
そうすれば、きっと楽になると想つ。
けれど、わかっている。そつすれば、そのまま眠りに落ちて、しばらくは田覚めないはず。

一応は、ひやんと考へるところの娘に伝えておかなければいけない。

あぐびがとまらない。

体が休息を欲している。

キアラの言葉も、半分くらいしかもう耳にはいってこない。

けれど。

もうひとつ大きなあぐびをして、今にも閉じそうな目をキアラのほうに向けると。

なぜかキアラの子猫のようにかわいらしい顔が、目の前にあった。もうあとわずかに身を乗りだせば、くちびるが触れるほど。どきん、と胸がなる。

息がかかる。

眠気も一瞬、遠のいた。

「かわいい同族の妹の窮地を。もとから助ける気だったのか、それとも今、助ける気になつたのか、といつことです」

くちびるを尖らせて、キアラはそう言った。

これはもう、あれだらうか。

キアラが助けてと大地の民が言う意味を、理解していようがいまいが、いただいちやつてもいいパターンといつやつだらうか。

あいにく、今まで生きてきて一回惚れなんぞといつものはしたことがないが。これはもしかすると、近いパターンなのかもしれない。

「なんだか、すゞぐ、前向きな質問だな。助ける以外の選択肢はないのか?」

からかう様子をつくつかり、一応念のために聞いてみる。
どうしても助けて欲しいのだと、そういうつもりじゃなくとも、
聞いてみたかった。

「絶対に助けてくれると、信じてますから」

けれど、キアラはまつぱりじまつぱりじまつぱりと、ひつひつしてられる。

それならもう、迷つまー。

もしそんなつもじじゃなかつたの、と言われても。ひつくり返せ
るくらいこばがんばつてみよつかなどガラこもなぐそんことを思
つた。

けれど。

とりあえず、少し眠りうと憩う。
キアラには悪いが、もう限界だ。

「まあ、あれだ」

「おれ、聞こかうひよつと寝るわ。悪いナビ、その話はまたあとで
おれが絶対に助けてやるから。
ちよつとまつてくれ。

「おれ、聞こかうひよつと寝るわ。悪いナビ、その話はまたあとで
キアラと期待をのせてみつめてくれるキアラ、せつとの思いで
な」

キアラと期待をのせてみつめてくれるキアラ、せつとの思いで
そつ告げた。

「おやすみ

起きたら、何とかしてやるから。
なんで王都にでてきたのだと、そつこいつとも念めて、ちゃん
ときいて、解決してやるから。

呆然としているキャラに心中で謝りつつ。
片膝をたてて、顎を乗せた。
必死の思いであけていたまぶたをおろすと、がくんと引き摺り下
ろされるような感覚が襲う。

『よつ、かわいい子がいたのか?』

深い深い、意識の底。

真つ暗な心の、自分でさえも意識できないような場所で、皮肉げ
な顔つきをした男がにやにやとわらついているのがわかる。

ケイオス。

なぜか拾つてしまつた、死すべき宿命の神子の、その欠片。

『まあ、ほつとけないふつではあるかな』

意識は半ば同化しているようだ。

ケイオスの考えは、なんとなくわかる。
たぶん、ケイオスもこちらの考えも、感情も手どりのようにわか
るのだらう。

言葉を返せば、そうか、と面白がりて頷いた。

『それなら、眠りを分割してやろうつか』

いつもよりも、はやく休眠から目覚めさせてくれるということか。体の負担は大きいが、キアラのことも気になるから、それは助かるかもしれない。

けれど。

ケイオスが、そんな申し出をなんの意味もなくしてくるとも思えない。

『欠片が降るぞ』

警戒して様子を見守つていると
にやり、と笑つて。

ケイオスはそんなことを告げた。

『巫女は予知して、王族はそれを知る。
ほら、還れ。あまり時間はないぞ』

押し返されるような、弾かれるような、そんな感触。
意識は眠りから放り出されて、気がつくと、先ほどの場所で木箱
から落ちていた。
ついでに被っていたローブが消えている。

ほんの一言一言、ケイオスと言葉を交わしていただけだったのに、
現実の時間はそれよりもだいぶんと過ぎていったようだった。

キアラの姿はなく、かわりに、マーリの残り香がした。

じゅとじゅつむ。～Side・ジイン（後書き）

今回でジインサイド終了予定だったのですが……
すみません、次話もジインサイドになります。

とおとふたつめ。～Side・ジイン

マーリが来たのか、とジインは空氣に残る匂いをかいで考えた。仕事で時折立ち寄る神殿の、筆頭巫女の弟だと聞いたことがある。

まるで少女のような面持ちをした利発な少年だが。

マーリの周りはいつでも少しだけ不穏な空氣が満ちている。不憫だと思って、かまうこともあるし、マーリもなつてはくれているが。

いま、気になる娘ができぱかりのこの時期に、あまり会いたい相手ではない。
というよりも、それほど仲がいいわけでもないのに、一体何の用事で来たのだろうか。

そう言えば、筆頭巫女ってのは、王女だったよなあ。

ほんのわずかに残る、血の香り。
マーリの周りは、やはり不穏だ。

この前、賢王と名高かつた先王が身罷つて、王座をかすめるように奪つたのは、確か先王の弟だったと思ひ。

「欠片が降る、か。巫女が予知して、王族がそれを知る 」

欠片、とは。ケイオスの欠片のことだ。

はるかいにしえに碎かれた、死すべき宿命を秘めた、神の子の欠片。

ジインの身体に宿る欠片と、おなじもの。

なぜ、ケイオスが碎かれたのかなどといふことは知らない。

その欠片が、散らばって。

時を越えて降つてくる、そのわけもしない。

けれど、ケイオスの欠片は。

多大な力を秘めていて、人間に余りある恩寵と凶兆をもたらす。

「まつたく、厄介な」

王の係累であるマーリが、この時期に。
欠片が降るとケイオスが告げたこのとき。
やつてくるのも、無関係とは思えない。

「ふたりは、一緒にいるのか……？」

ふらりと通りに出て、空氣のにおいをかぐ。
そのままたどつていけば、キャラのにおいもマーリのにおいも、
同じ方角からやってくる。

もつとも、考えてみればそれも道理だ。

武術に長けた大地の民　頼みの綱である自分が寝こけていて、
その隣に少し頼りなさそうだが大地の民がいたとしたら。少しくらい
の頼りなさは、大地の民という名前がカバーしてくれる。ちょつ
とくらい頼りなくても、大地の民なら、強いに違いないと思い込み。
傭兵になってくれるよう、頼むくらいはするだろう。
聰いマーリなら、なおのこと。

結局、においを追う途中。

マーリが無事に追つ手をまいて、隠れたところも確認したし。相手を殺したくないといつ甘さで、自ら窮地におちいっていたキアラもきちんと助けて回収できた。

助けての大地の民としての意味を、まるでわかつていなかつたようなキアラに、少しほこぼりを意識するよつに仕向けることも、出来たと思つ。

今のところは万事つましくいっているが、問題はこれからだ。

いろんな眼差しを向けた後、さきほめてほてと歩き出したキアラの、ゆらゆら揺れる金茶の尻尾の先をみつめながら、ジインは深く息を吐き出した。

マーリを、キアラの言ひ場所で回収するのはまだいい。だが、マーリを助けて、そのあとまだいるのだ。

自分もキアラも、一介の大地の民で、なんの権力も持つてはいない。

少しくらい武術に長けていたつて、それが何だというのだ。数を頼みに出来る、権力といつ暴力の前では、なんの力にもなりはしない。

ふつてくるであろう欠片にしても、どうしていいものか首田見当がつかない。

それよつも前に、ところかまわざ暴力的な眠気に教われる自分に、
キアラとマーリを護りきれるとは到底思えないということもあった。

おれ、弱音しか吐いてないな……

苦い血口嫌悪をかみ締めながらも、今ジインにどうなることは。
とりあえずこみ上げてくる眠気を封じるべく、マーリを拾いつままで
に少しでも休んでおくことだけだ。

まるで軽蔑するようなキアラの眼差しに耐えながら。
ジインは面倒こなごいり、とりあえず部屋を取ったのだった。

じゅとふたつめ。～Saide・ジイン（後書き）

長かったです、ジインサイド終了となります。
まつりとつかふたつ、この章がついでから、新章となります。

ひととみつわ。

神様の、かけら……か。

あまりにも現実的ではなくて、思わず胡乱なまなざしを向けてしまったが。

宿の部屋に入るなり、寝台に倒れこんで、すうすうと眠ってしまつたジインを見ていると、それも真実かも知れないと、少しばかり思つてしまつた。

神様の欠片を拾つてしまつた少年の、物語を知つていて死のうとしていた少年が、空から降つてきた欠片に当たつてしまふという話だ。

どうせ要らない身体なら、自分によこせといふ神様に。

少年はその身を差し出すのだ。

少年は、神様の力を借りて、乱れた国を治め、最後には王様になつたと思つ。

物語はそこで終わつてゐるから、少年のその後のことは知らない。けれど、物語であるくらいなのだから、神様の欠片といふ話は、もしかしたら本当なのかもしれない。

キアラはひとつ、溜息をつくと。

寝台で寝息を立てるジインのきれいな顔を覗き込んだ。

どうせ泊まるわけではないから、一部屋でかまわないといったけれど。

同じ部屋で、ほとんど知らない人物が寝ているといふのは、やはり少しばかり違和感があると思つ。

まあ、同じ大地の民だからいいけど。

眠るジインの頬をつんづんとつつき、キアラはあまり上等ではないソファに身体を沈みこませた。
細かい傷がたくさん入ったガラスがはめ込まれた、宿の窓。
そこからは、天高くそびえたつ、という形容がぴったりの、白いお城がよく見えた。

「おひじさま……」

ぱつりと呴いて。
手のひらをぎゅっと握り締める。
そんなに遠い場所とも思えないのに、どうしてすぐに行けないのだろう。

「『めんね、力になりに行くって、約束したのに』

この数年間、幾度も思い返した彼の顔を、もう一度脳裏に描いてみる。

ほんの少し病的な、白い肌。

月の光のような、細い金色の髪。青い青い、空のように青い瞳。寂しげに、わらう人だった。

ニンゲンは怖いのだと教えられていたけれど、彼はとても優しくて。寂しそうで。せつなそうで。

一度でいいから、心から笑って欲しいと会つたびに思つていた。

彼が、なんのために。大地の民のすまつ森にやつてきていたのかは知らない。

大地の力を借りにきたのかとも思つたけれど、誰一人として、

彼についていった者はいなかつた。

私が、私が一緒に行く！

哀しくて、切なくて。

そう叫んだあの日を、覚えている。

私が、おうじさまと一緒にいくから！

あんなに寂しそうに笑う人を、一人にはしておけないと思つた。
けれど、キアラはまだ成人にはなつていなくて。
成人していなくては、森から出ることは許されていなくて。
結局一緒に行くことは、できなかつた。

キアラが、私の味方でいてくれるのだと思つだけで、心強く
在れるよ。

行くから！ 大人になつたら、きっと会いにいくから！ 力
に、なれるようになら……

人間にとつての約束は、大地の民の約束ほどは重くないと、あに
さまもあねさまも言つていた。

けれど。

おうじさまはきっと、約束を覚えていてくれると思つのだ。
覚えていてくれると、信じているのだ。

何年たつても、きっと。

待つてくれるので、信じている。

「「「あんね、おうじさま。絶対いくから、もつもつと、もつりゃ
つだけ、待つて」」

すぐに行くつもりだつたけれど、マーーと出会つてしまつたから。
おうじさまとおなじ、金色の髪の毛と、青い瞳の女の子みたいな
男の子。

あんなに困つている子をほつてこよとなんて、できなこ。だか
ら。

もうすこしだけ、まつてほし。

おうじさまには、一番大切なひとは味方になつてくれなかつたか
もしれないけれど。
他の味方はいるでしょ？

でも、あの子は今、ひとりぼっちだから。

田に映る全員を助けられるほど、強くないのはわかつてゐるけど。
それでも、力が貸せるのなら、役に立つてあげたいと思つから。

お城から視線をそらして、キアラはソファの上で膝を抱え込んだ。
眠るつもりはないけれど、このあとどれだけ動かなくてはいけな
いかわからないのだから、少しくらいは休んでおかなくてはならな
い。

まぶたのうりで、寂しそうに笑つて、おうじさまに、まつて
と話しかけて。

キアラは深く息を吸い込んだ。

ひととまつり。 (後書き)

回想編をちよつとおじょつてしまつたので。
次話は新章にこまかー

ひとつめ。

幾度も田を閉じたけれど、眠ることも出来なくて。ジインが目覚めるまで、じつと窓から外を見ていた。

お城の真白い壁が、やがて夕暮れどきの金色がかかったオレンジ色に染まり。やがて名残を惜しみながら西の山の向こうに太陽が沈んでいくと、青みがかった夜の影にそめられた。

もう少ししたら、完全に夜の中に沈むのだろうと思つ。

窓にはそれぞれ橙色の明かりが揺れていて、時折人影が通るのが見えたけれど。

あまりに遠すぎて、おつじさまがいるかどうかはわからなかつた。

「おはよ」

視界の端で、ジインが身じろぐのが見えて、キアラは視線を窓からジインのほうへと向けた。

薄っぺらな一枚の毛布を抱きかかえるように丸まって寝ていたジインは、鼻の頭に皺を寄せるよつにして眠たげに辺りを見回すと、キアラを認めて数回瞬きを繰り返した。

「ああ、おはよう」

夜だけどな、という突つ込みもあることはなく。

ジインはひとつ大きなあくびをしたあと、思い切り伸びをした。

「そろそろ時間か？」

「うん、そろそろこいと思ひ」

キアラが言えば、ジインはひとつ、うなずいた。

「ジインってなにをしている人なの？」

鏡の前で、ジインが洗面器に水差しの水を注いでいる。眠気覚ましに顔でも洗つつもりなのだろうか。

キアラが聞えれば、ジインはなぜか一瞬手を止めた。そしてそのまま、無言のまま顔をざばざばと洗い出す。手近にあつたタオルで丁寧に顔の水気をぬぐつてから、ジインは初めてキアラのほうをまっすぐにみつめた。

「神話研究、とでもいえばいいか？」

「え？」

「神代の研究をしている。神話に語られるどこまでが真実で、どこまでが支配者が作った話なのかということを、膨大な資料を照らし合わせて読み解いている。時折、医者の真似事もする」

手櫛で髪の毛をざざつとまとめ、ジインはどこか自嘲気味に笑つた。

「いつでもどこでも寝てしまうから、傭兵家業には向かなくてな。神殿横の資料館の研究者という肩書きだけど、まあ半分くらいは寝てる気がするな」

「調べたら何か、いいことがあるの？」

ジインの職業を馬鹿にするわけではないが、そんなことをして一休何の意味があるのだというのが正直な感想だ。

「いいことは、あるかもしないし、ないかもしない。なんにせよ、歴史は繰り返すものだから、自分たちが歩いてきた道筋を明確にしておくのは、多少のこともあるんだろうよ。それに、まあ。この身体に宿る神の欠片がなんのためにあるのかも、少しくらいはわかるかもしないしな」

ふうん?とキアラは腑に落ちなによつた表情でうなずいた。
当人にしかわからなこととこつのは、ナツコの心にあるものだ。

「マーリとも資料館で知り合つた。マーリの姉さんが神殿の巫女でな。おれの友人なんだ」

一通りの説明を終えたあと、ジインは少し首を傾げてこちらを見やつた。

「おれもひとつ、キアラに聞きたいことがあるんだ。キアラはなにをしに王都にきたんだ?」

それはまあ、一緒に行動するなりば。押されておきたい質問のひとつだとは思つ。

けれどこま、キアラひとつはあまりされたくない質問ではあつた。

おひじりま。

なんと説明すれば、わかりやすくて突つ込まれないだろ??

心の中で言葉を吟味しながら、キアラは眉をぎゅっと寄せて深く考え込んだ。

ふたつめ。

口を開け、言葉を搜して、また閉じた。

キアラが言こよどんでいる間にも、ジインは手早く身支度を整えていく。

「……何年か前に、森に来た人に、会こに来たの」「その様子をみつめながら、ようやっとそれだけを告げると。ジインはただ「そうか」と肯いた。

部屋をぐるりと見回して、何も忘れていないことを確認してから宿を出る。

「会えるとこいな

通りに出でから、ほつりとジインがそんなことをこつた。ジインも、二ンゲンはすぐに約束を忘れてしまつと思つてこるクチなのだろうか？

「会えるよ。約束を忘れるような人じゃないもの」

口を尖らせて反駁するが、ジインは静かにくびりびるを笑みの形にひいた。

「忘れなくても、時間は流れる」

意味がわからない。

けれど、ジインのその表情はあまりにも静かで。諦観といつ言葉がぴったりとくるような顔つきで。おつじさまはそんな人じゃないのだとうに言い募りたかったけれども、なんとなく気勢をそがれてしまった。

そのあとは互いに無言のまま歩く。

途中露店で、ジインはまたローブを買い、キアラには大きめの帽

子を買つてくれたが、基本的に会話はない。そのわずかな会話でジンがぽつりと話したことによれば、王都では大地の民は珍しいから、目立たないようにするためにはかぶつているほうがいいということらしい。

先ほどの傭兵たちと会つかもしれない。

警戒しつつ、道を行く。

けれど、マーリとの待ち合わせ場所までは、拍子抜けするほどあつけなく。何事もなくついた。

大きい方の門では、いかめしい顔つきの衛兵たちが、町に入る二ングエンや亜人種たちを厳しくチェックしている。特になにを見ていののかは知らないが、とりあえず通行料を納めて、ついでに犯罪者手配書に載つていなければ、誰でも王都に入れられるのだから、容易いものだ。

逆に出るときはもつと簡単で。

一応手配書はチェックするよつたが、実際のところほとんどチェックなんてしてないんじやなかろうかというのが見ていての正直な感想である。

「二ングエンがたくさんいる……」

エルフや獣人といった亜人種も時折見かけたが、通るのは人間が大半だ。

王都の門は、わかつてはいたことだが、とりあえず人間で溢れている。

今日、初めて町に入つたばかりのときも思ったことだが、とりあえず人間が多くすぎだ。

「そりや、人間の町だからな」

詳しく述べたわけではないが、王都でくらして長老のジインは苦笑まじりにそう言つて笑つた。

「マーリは無事かな」
「どうだうな」

匂いをたどるからとはいつたものの、これだけ人間が多いとさすがに匂いが混じつて追いにくい。
門の付近は、王都に入る人と、王都から出る人でじつた返している。表通りも人が多いと思ったが、その比ではない。
キアラが町に入ったときは、馬車に揺られていたし、なにより小さい方の門から入ったから。人が多いと思っても、ここまでじゃなかつた。

「マーリ……」

においなんてそう簡単に消えるものじゃないし。
追跡だってそう難しくないと思つたのに、この人間の多さが邪魔をする。

あせつて周りを見回せば、ジインがぽんと軽く背中に触れてきた。

「落ち着け。大丈夫だから。ちゃんとみつかる。ここのあるあたりにいたのは間違いなさそうだ」

そうジインがいつて示した先には、少し太めの樹があつて。
キアラが寝こけていたジインから奪つた、例のフードつきのロープが、なぜか下のほうの枝に大雜把に結ばれていた。

風に飛ばされて、ひつかつたとか、そういうのではなく。
きちんと何らかの意志を持つて、そこに留め置かれたロープ。

近づけば、マーリのこおいがかすかにした。

「どうこう」とだらり。
「わあな」

もし、追手に見つかって逃げるなら。あるいは、近くまで追手が
来たから隠れていた場所を移すなり。こんなふうにロープを結び付
けたりはしないだろう。

悪目立ちをするもとだ。

キアラは小走りに駆け寄つて、ロープを手に取る。
ロープは思ったよりも固くしつかりと結ばれていて、苦労して解
けば、結び目からはちらりと何かが落ちた。

白いハンカチに、殴り書きよつた文字のあと。

『太陽と月が眠る場所』

意味を図りかねて、ジインを振り返れば。
思ったよりも近くにいたジインは、ひびく泣き顔つきをしていた。

みつね。

「ジィン、心当たりがあるの？」

太陽と、月が眠る場所。

殴り書きの文字があるハンカチを、やつてきたジィンがそつとキアラの手から取り上げる。

「ある、といふか……」

言いよどむジィンの表情は相変わらず複雑で。見守るキアラの前で、ただ深く息をついた。

「とりあえず、マーリサの付近にまいりたいんだら、においもしないしな」

それはまあ、確かにそう思つ。

すっかりあたりは暗くなつて、空には星が瞬いていたし、先ほどまで静かだつた通りの酒場からはオレンジ色の柔らかな光が漏れて、にぎやかな喧騒がこぢらまで響いてくる。

門を出て行く人間も、入つてくる人間も、あいも変わらず多かつたが、それももうほんのわずかのことだらう。あと一刻もすれば、門は閉じられて、明日の朝まで開くことはない。

よほどの緊急事態でもない限りは。

「とりあえず、飯でも食つかな」

溜息交じりのジィンのひとついとこ、キアラは思わず眉を寄せた。

キアラも確かにおなががすいていたが、今はそれどころじゃないだろう。
待ち合せ場所に、マーリはおりず。

かわりに残されていたのは、意味のわからないメッセージ。

「マーリは？」

つい、とがつた声を上げてしまつたのもいたし方のないことだとおもう。

「思つていたよりも、事態がややこしそうだし。こつたん状況整理をしたいんだけどな」

キアラのとがつた声を咎めるでもなく、のんびりとジインはそう言つて。

きょろきょろと辺りを見回すと、先にたつて歩き出した。

「状況整理？」

「そう。ちょっとめんどくわいつな感じだからなあ……少し情報収集もしたいし」

小走りに、キアラはジインのあとを追いかける。
ジインは、特に入りたい店があるふつでもなく。
ゆつたりとした大股で、人ごみを器用にすり抜けて歩きながら、
通りの酒場を覗いていく。

キアラは、無言のままジインの後に続くことにした。

話の途中で寝てしまうジインはどうかと思うが、たぶんきっと、自分よりもこういう事態を幾度か経験しているのだと信じたい。
それならばきっと、任せてしまつたほうがいいに決まつてこる。

「おや、眠り男」

見知らぬ男からそんなふうに声をかけられたのは、通りを歩きな

がら、10軒ばかり酒場を通り過ぎたあたりだつた。

「かわいい女の子連れじゃないか、めずらしいね」

くつくつと楽しげに笑う男は、なぜだかとても目が細かつた。薄く大きな口も、なんだか全体的にのっぺりとした顔の印象だ。

「お前を探していたんだよ」

「わたしを？ 光栄だね。高名なる眠り男殿が、わたしに何の用だ

る？」

細い目の中、瞳が油断のない冷たい光を放つていて。キアラはぞくつとしてとつさにジインの影に隠れたが、どうやら知り合いらしのジインは別段氣にもしない様子だ。

「最近、神殿の様子はどうだ？」

「神殿？」

「神子の神殿だよ」

細い目の男の目が、さらに細くなる。そんな男を近くの酒場の方へと誘導しながら、ジインがちらりとあたりの様子を窺つたのがわかつた。

「神子の神殿か。ちょっとキナ臭いところだね」

細めの男がくすくすと楽しげに笑う。不穏な空氣の似合ひの男だと、その後を追いながら、キアラはそんなことを思った。

やつしゅ。

酒場は喧騒で包まれていた。

端っここの少し奥まつたところに陣取ったジインと細田の男は慣れた様子で麦酒と軽食を注文する。キアラがどうするべきかと惑つて居ると、黙言でジインが隣の椅子を引いた。

一拍の間を置いて、おわりにキアラのために、よく冷えた果実水も頼んでくれる。

「やつしゅ、そちらのお嬢さんはどなただろ?」

ジインのその様子に、細田の男は興味を抱いたらしく。色素の薄い灰色の瞳が、じっとこちらをみつめてくる。

「手を出すなよ? 名はキアラ。森から出てきたばかりなんだ」「ほづ? 君の婚約者とか?」「やつしゅわけじゃないが」

ジインは曖昧に言葉を濁すと、わずかに肩をすくめた。

大地の民の、あにと妹の関係を、人間に説明するのは面倒くさいということだろうか。

けれど、細田の男はそんなジインの様子にさらに興味をもつたらしく、つと細い指先を伸ばしてキアラの手に触れてきた。

おい、とジインが眉を寄せて男をこらむが、どこ吹く風といった様子だ。

「わたしはカツシ。ジインとは腐れ縁とでも言つべき間柄でね。よくつるんでいるんだよ。以後お見知りおきを」

ぐすぐすとカツシは笑みを浮かべ続けているが、その瞳はやはり笑つていよいよに見える。

ひんやりと冷たい指先が、どうにも落ち着かない。

全体的にあたたかな印象のあるジインとはあまりにも対照的だ。

思わず助けを求めるように、ジインを見れば。

ジインは無言のまま手を伸ばし、器用にカツシの手だけをテーブルの上から払いのけた。

「妬いているのかい？」

「なんでもいいが、大地の民の娘に気安く触れるな

「ほう、それはどうして？」

「大地の民は嫉妬深い男が多いのや。くタに触つて殺されてもおれは知らないよ」

ジインの言葉が面白かったのだろうか。

カツシはくくつと肩を震わせて、麦酒のはいつた木のコップを仰いだ。

「嫉妬深いって、それは君のことだろ？」「

ジインは答えなかつた。

カツシはこちらにも視線を向けてきたが、そもそも一ソングンのことによく知らないキャラに答えられるはずがないのだ。

「まあいいや。それで、眠り男。君はわたしになにを聞きたいんだい

「どうやらカツシロは追及を諦めたらしい。

恰幅のいい中年のおばさんが運んできた、鳥の照り焼きをフォーグだけで器用につつきながら、ようやくと本題を切り出した。

「神子の神殿のことだ」

「ああ、キナ臭い件かい？ そう面白い話でもないよ」

ジーンは麦酒のつまみに、チーズを衣を着けて揚げたもの。

話のついでに、こちらの口に放り込んでくれたが、とりと湯け

てとてもとてもおいしかった。

「ひとつとしている、苦笑して眞面目にひびきこしてくれる。

どうやら全部くれるらしい。」

「そもそも、砂禍^{サガ}が起きると予言があったという話だ」

砂禍とはなんだらうと、キアラもあらうと思つたのだが、とりあえず一人の会話に割り込む隙はないで。チーズを平らげることに専念することにした。

熱いうちに食べなければ、せつかく蕩けたチーズが固まってしまう。

「そうすればきっと、おこしさも半減するに違いない。

「砂禍、か……」

「おや、眠り男は博識だねえ。こんな物騒な単語、なかなか一般人には漫透していないと思つたけれど」

それなら、なぜカツシロは知っているのだろう、とも思つが。この得体の知れなさなら、もしかしたらなんでもありなのかもしないとも思う。

「砂禍

　砕けた『忘らるる神の欠片』……」

「死すべき宿命の神子の、その欠片。滅びの砂を、広げるモノ」

咳くジインに、カツツュが言葉を添える。

忘れられた神、というのは、死すべき宿命の神子ケイオスの別名だ。

誰もが知っている神様なのに、忘れられたという通り名も変だと
は思うが、なんでも、ケイオスについての神話がほとんど散逸して
しまつて残っていないから、ということらしい。

やつしゅ。（後書き）

タイトルを「やつしゅ」と変えてみました。

二つめ。～Side・マー

「うしょく、と思つた。

厳選したはずの『余』のメンバーに裏切り者がいるなんて。
いやという時の逃げ道である、姉のいる神殿までも手を回され
て、芝居でもなんでもなく、本当にどうしようかと思つたんだ。

そんなときに、ふとひらめいたのが、

資料館にいつもいる、灰色髪の大地の民の男のことだった。
なにをしているのか、わからない男。

姉の友人で、かわりもの。

けれど、大地の民だ。

戦闘に長けた民。

ならば、あるいは。もしかして。助かるかもしれない。

本当がどうかは知らないが、神の欠片を宿しているとか自称して
いるその男は、とりあえずいいやつだった。

自分の外見に惑わされて、いるのかどうかはわからないけれど。
いつもよく構つてくれるし、じつつきから護つてもうつたこともあ
る。

唐突に眠つてしまつのが玉に瑕だけれど。

見つければ、きっと。なんとかしてくれるかもれない。

結構不純な動機から、ジインを探して。

でも、寝ていて。

寝こけていたジインの代わりに、大地の民の娘を雇つことにして。
意外と使えた『ジインの代わり』に逃がされて門のところまで逃
げてきたのは夕方のこと。

約束の時間まではまだ少し猶予があるとはいえる。

こつ見つかるかわからないこの状況 ついでにいうなら、護衛すらもないこの状況で、のんびり夕食をとる氣にもなれはしない。

「うううと空腹を訴える胃をなだめながら、門に程近い木の上から様子をみていた、その時だつた。

「……姉さま？」

思わずじぽれた、自分の声にどきつとする。

大きな門を出て行こうとする、簡素な駕籠。その、小さな窓からちらりとみえた、目隠しをされた女の横顔。

ほんの一瞬しか見えなかつたけれど、あれはまさしく。

「……どうすれば」

たつたひとりの、姉。

神子の神殿の筆頭巫女 神殿で、神官長と同位の彼女が、何故今。この時期に、駕籠に乗せられて王都から出て行くのか。尋常ではない。

ましてや、数日前に、姉が予知た、砂禍の飛来。

伝説の中に語られる忘れられた神 死すべき宿命の神子の欠片が、禍をまとつて降つてくるという。

そんな伝説級のトラブルがやつてこようとしているこの時期に、筆頭巫女が目隠しをされて出て行く理由がわからない。

むつみ。～Side・マーリ

「ここに隠れていれば、安全だ。

少し頭が足りなさそうな大地の民の娘がきつとみつけてくれるだらうし、ジンだつておつけやつてくれるのはず。あのお人よしな大地の民は、ぼくのよくな弱い子供が困つてこりを見捨てるなどできるはずもないのだ。

「ねえわせ……」

でも。

だけビ。

「のままここに隠れていたら、姉はどうなるといつか。自分の安全は護られても。

いつも、自分を護るために矢面になつてくれる、姉は。

くそ、と低く毒づいて、音を殺して木から飛び降りた。いつもなら姉が苦い顔でたしなめてくる行為だったが、今は咎めるひとも誰もいない。

降りた瞬間、やはり足元に積もつた木の葉ががさりと音を立てたが、幸いにも雜踏にまぎれて誰も気づきはしなかつたようだ。

「……どうしようかな」

「のまま、姉を追うのはいい。

けれど、追つてくるはずのふたりに、何かしるしを残しておかなければ。今度は自分が助けてもらえない。

血漫ではないが、身体を動かすのは苦手だ。

頭脳戦なら得意だが、脳みそまで筋肉で出来ていそうな傭兵どもに勝てる気などはさらさらしない。

そういう実戦系は、実戦系が得意な奴らに押し付けてしまえばいいのだ。

ふと思いついて、これまで羽織つていたジインのローブを脱ぎさる。

懐から取り出したハンカチに、殴り書きようにしてメッセージを刻んだ。

『太陽と月が眠る場所』

創世の神の涙から生まれた、死すべき宿命の神子ケイオス。
その誕生と宿命を喜び嘆いたことから生まれた、光と闇の、二柱の女神。

太陽も月も、その女神たちの眷属だ。
死すべき宿命の兄をまもるべく、定めづけられた女神たちの眷属は、昼も夜もケイオスを見守り続ける。
だが。

太陽も月も。昇らぬときがある。

太陽と、月が眠るとき。

それは、ケイオスが違う存在に護られている時。

護るのは、ひと。そういうことになっている。

護るのは。ひとのみこ。今現在は、筆頭巫女の、姉のことを指す。

頭の弱そうな娘には通じないかも知れないが、ジインにはきっと、通じるはず。

不安を無理やりに押し込めて、殴り書きのあるハンカチを枝にそわせて、ジインのローブを乱暴に結び付けた。

「はやくきてよ、ジイン。お願ひだから」

いつも、周りに誰かいた。

困ったことは、うまく動かしたおとなたちがいつも片をつけてくれていた。

自分はそうなるように謀るだけ。

こんな一人ぼっちは初めてだ。

動かせる大人たちが、こんなに少ないことも。

姉が乗せられた駕籠はいつのまにか門の前から消えていた。
門を出る人間と入る人間で溢れていたから、もう少し時間がかかるかと思つたけれど。

さすがに、あんなに怪しい駕籠を門から出さうとするだけのことはある。なんらかの権力 それも、門番を黙らせてしまうだけの力を持つた誰かがバックについているらしい。

こっちの方面の門から出た先に、領地を持っているのは誰だったか。

脳裏に地図を描きながら、こっそり門を出た。

身分を明かせば止めるものはいないだろとは思つたけれど。それだと痕跡が残つてしまふ。

痕跡は出来るだけ残さないのが懸命だ。

まあ、追つてくると信じている、あのお人よしの大地の民は少しあかり苦労するかも知れないけれど。

ななつめ。

砂禍^{サカ}が、と言つたきり、ジインはむつりと黙り込んでしまつた。そんなジインには構わず、カツシユはひとりで麦酒をあおり、パイ生地に卵と野菜を詰めて焼いたものを器用にフォークとナイフで切り分けてせつせと口に運んでいく。

「キアラさんも食べたらいいよ？」

ふと、氣づいたように、カツシユは一きれ分けて小皿に乗せてくれた。

「ありがとうございます」

お礼をいつてフォークを手に取つたものの。

黙りこんでしまつたジインのことが気になつて、食べる手はあまり進まない。

「カツシユ」

「うん、なんだろう？」

「これを見て欲しい」

ジインがそう言つて差し出したのは、マーリが残していったハンカチだつた。

「ふむ、随分と高価そうなハンカチだね」

書かれた文字に対してではなく、カツシユはとりあえずハンカチそのものについて、そんな感想を述べた。

「まあ、いいとこ坊ちゃんみたいだからな。それよりも、これだ」

「太陽と月が眠る場所、か」

「砂禍の件と関係があると思うか？」

「あるんじゃないのかな」

上品な仕草で口許をぬぐい、カツチエはハンカチを手に取った。

「太陽と月が眠るのは、ケイオスが護られている時だけという神話があつたね。建国の神話のあたりだつたから、どこまで本当かは知らないが、護るのはミコじやなかつたかな」

カツチエの言葉に、ジインはそうだとただうなずく。

「ケイオスの眠りをやさしく抱くかわりに、ミコは国の繁栄を望んだそうだ。ケイオスはミコのもとで眠り、太陽と月も、ケイオスを見守りながら休息をとる その言葉が示している場所は、神子の神殿だと思うのだが」

ジインがそう言えば、カツチエはつまらなさそうに麦酒のカップを指先で弾いた。

「まあ、間違いなくそういうね」

「神子の神殿で何があつたんだろうか」

「あつたんじやないでしようかねえ」

くすくすと笑つて、カツチエは細い皿をさらじつたらと細めた。軽く、指先を鳴らす。

ほんの一瞬、影が酒場を走り抜けたような気がするのは気のせいだつたのだろうか？

「まあ、眠り男と遊ぶのは面白いから、今回のお代はおまけにしておいてあげるよ」

楽しげにそつとつて、カツチエはもう一口、麦酒を口に含んだ。

ななつめ。（後書き）

私が書く話ではなぜか常にヒロイーンが活躍しないことがあります。
なんでだらう……？

今回、分量少なめです。
長らく説明が続いてきましたが、それからいよいよ本筋が動き始めます（
予定）

さひつ。

こつたになにがじうなつてこむのせいか。

ジインとカツシュは難しい話を続けていて。軽食を平らげたあと、暇そうにしていると、ジインが気を利かせてくれて頼んでくれた甘くてふわふわしたかわいらしいお菓子。ケーキとかいうらじしこふわふわとした生地に、生クリームとかいう白くてやわらかくて甘いものをたっぷりとつけて食べると、この上なく幸せな気分になれた。

それはまあいい。

問題はこつのまにやら意識が飛んで、眠つてしまつたことだ。カツシュとジインの姿が消えてこむことだ。

「えつと……」

きょろきょろと辺りを見回す。

「どうか、ここはどこ?」

そこは小奇麗な小さな部屋で、本棚と小さな机とソファだけが置いてあつた。

ジインとカツシュの姿はなく、ソファで寝ていていたキアラには、上質の毛布がかけてある。軽くてふわふわとやわらかくて、このまま毛布を抱きしめてもう一眠りしたくなるような気持ちのよせだ。

毛布の誘惑に頑張つて打ち勝ち、キャラはそつとソファから滑りおりた。

そつと毛布をソファの上に戻し、もう一度あたりをきょろきょろ

と見回してみる。

小さな窓がはまつていて、そこからは、真っ白なお城を望むこと
が出来た。

「あれ？」

そこで気がついて、キアラは首を傾げる。

自分は一体どのくらいの間眠っていたのだろうか。

酒場に入った時は、確か夕暮れ直後だったと思うのだが、今空は
青く澄んでいる。

まだ低い位置に太陽は輝いていて、とても不思議な心持がした。

「ジインもカツツェさんもビリにいったんだろう……？」

わずかに室内に残っている匂いから、自分をここに運んだのは、
ジインとカツツェで間違いなさそうだが、肝心の本人たちの気配が
微塵もない。

とりあえず状況把握を優先すべく。

壁にそつとたてかけてあつた大剣を背中に背負い。

ドアノブに手をかけて、キアラは思わず眉根を寄せた。

ノブは、回る。

でも、開かない。

内側に、鍵はない。

つまり。外から鍵がかけられていると、そういうことだろうか？

一体どうしようと/or/。

わずかに唇を尖らせて、キアラは状況を分析しようと試みた。寝ていた自分、消えた一人の姿。かかっている鍵。

閉じ込められた？

同族の兄相手に、それはないとと思うのだが、なんにせよ、ここはキアラが知っている常識の通用しない王都である。

「……とりあえず、マーリを探さないと」

一人「」ちてキアラは一度背負つた大剣をはずし、両手で体の前へと構えなおした。

大剣を前に構えて、とりあえず深呼吸をする。

扉を壊すのは、そう難しくはない。

ただ。大きな音はするだろう。
もし、ジインたちに何らかの意図があつて閉じ込められているの
なら、そんなに大きな音がするのは歓迎できない。脱出しようとし
ているのがバレバレだ。

というよりも。なんで自分は閉じ込められているのだろう?
自分を閉じ込めたところで、何のメリットも見出せないと思うの
だけれども。

だとすれば、何か理由があるのだろうか?
IIIIについてくれという、ジインたちの意思表示なのか?

剣を構えたまま、キアラは悩んだ。

けれど、とキアラは思つ。

閉じ込めたのが、ジインだとしても。ジインだつて、大地の民な
のだ。

自由と力を愛する大地の民を、閉じ込めるとの意味をわかつて
いないとは思えない。

軽く息を吸つて、大剣を振り上げる。

仮に大きな音がしたとしても、人が集まつてくる前に逃げ出せば
いいだけの話だ。

そのまま振り下ろそうとして、キアラはふと動きを止めた。

マーリは、どうやって探せばいいのだろ~?

「探さなければ」とは思つていたけれど、こまちんのことに思つて至つた。

ぐぬぐぬと思考がムダに回る。
まわりすきで、空回つしている気がしないでもない。

マーリがどこに行つたかといつゝとは、ジイントカッシュなら見当がつくかもしないけれど、王都に着たばかりの自分が推測しようところのはじきさか無理があるような気がしてきたのだ。
この部屋には、一人のにおしか残つていなし、それなりばやはつこで待つていたほうがいいのだろうか？

「うへ……」

自分の迷走する思考を扱いかねて、キアラは剣を下ろして低く唸つた。

最善策があるで浮かばないのは何故だりつへ。

ソファに剣を立てかけて、キアラはやつと窓際の方へと進む。
おつじさまがいるであろう、お城でもみつめれば、少しは心が落ち着くかと思ったのだが。

「え？」

ふと、窓の外を見下ろして、キアラは目をしばたかせた。
今更ながら気づいたが、ここは二段やや一階ではなかつたらしい。
眼下を、ひょろんとした体型の男が長い手足をもてあますようにして走つてゐるのが見える。のつぺりとした顔立ちの、細い目の中の男カツツェだ。

「なに、してるんだ？」「……？」

わざかに田を細めて通りを窺つては見るものの、近くにジインの姿はないようだ。

カツシュの後ろを小走りに駆けてくる、傭兵らしき男が、ひとり、ふたり、さんごん。

そろはやく走っている様子ではないが、もうすぐカツシュに追いつきそうな速さではある。

「逃げてる、のかな……？」

時折後ろを窺う様子のカツシュを見ていれば、その表現がしつくりと来るようだった。

あまり運動は得意ではないのか、カツシュの駆け方は本当に不恰好だった。

「えっと……」

とりあえず、助けるべきなのだろうか？

自分を閉じ込めた疑惑のある男ではあるが、マーリへと続く道筋の鍵を握っている男でもある。

ちょっと考えてはみたものの、もとよりキアラはあれこれと考えるのが得意な方ではない。ソファに立てかけてあつた大剣をつかむなり、嵌めこみの窓を剣でなぎ払うようにして突き破った。

「がしゃん！」とひどく派手な音がする。

じつらに向かつて走つてきていたカツシュはもとより、後を追つてきていた傭兵たちも驚いたようにこちらに視線をよこしてきた。そんな彼らを一瞥して、キアラは窓から飛び降りた。

いくら太陽が真上に近い つまりは昼時だとはいっても、裏通りらしいこのあたりに、他に人影はほとんど、ない。

「おや、お嬢さん。起きたんだね」

森を駆け回っていたキアラにとつては、二ングエンが作った建物の2階3階くらいの高さは、たいした問題ではない。大剣を負ったまま地面にとんでも、バランスを崩したりと無様なことにはならなかつた。

ほんのわずかに息を切らせて、カツツュがそつ頬をかけてくる。

「おはよ〜」
「おはよ〜」

細い田をさらに細くして挨拶を返したカツツュは、そそくセトキアラの後ろに回りこんできた。

「いやあ、助かったよ。ちょっと神殿にもぐりこんでいたら、見つかっちゃってねえ」

どうやら、キアラに撃退してくれと言いたいらしい。
まったく困っていない様子で、助かったといわれても、むしろこちらが困るばかりなのだが。

11月のつぶやき（後書き）

更新あけてしまってすみません^ ^

とお。

「あの。カツシュさん、なんで私の後ろに回りこむんですか？」

護れということだらうと思いつつ、キアラは一応突っ込んでみる。
男も女も等しく戦う大地の民とはいえ、依頼人でもないのに男を
護るのはこきさか抵抗がある。

「私は頭脳派でねえ。あんまり肉体労働的なことは得意じゃないんだよ」

けれど、カツシュは悪びれる様子さえない。
肩をすくめてうつすらと笑って見せた。

「昔からよく言うだらう、適材適所。君の分まで頭は動かしてあげるから、君は私の分までしつかりと戦ってくれよ」

まったくなんていい草だ。

けれど、確かにカツシュは弱そうだ。
体つきもひょろんとしているし、筋肉なんてどこにしているの？といった風情である。背は高かつたが、長い手足をもてあましているようで、走ったり歩いたりしているのを、どこか不恰好なのである。

「貸しに、しておきます」

けれど、何かが腑に落ちない。
唇を尖らせてそう宣告すると、キアラは改めて傭兵たちに向き直った。

よく見れば、傭兵たちのうちの一人に見覚えがある。

昨日、マーリをかばって対峙したうちのひとり、ついでにいだけの髭面と違つて、冷静に応戦してきた男だった。

背中から剣を下ろし、ゆるく構える。

腰を落とし、足を軽く開いて、意識を澄ます。

柔らかい布で作った靴の下で、石畳と砂がこすれて音を立てた。空気が、ぴんと張り詰める。

動くのは、誰？

「やめなさい」

ぴん、と張り詰めた糸を切ったのは、カツチエでもなければ傭兵たちでもなく。ましてやキアラ自身でさえもなかつた。

「ロータスをね」

昨日も会つた傭兵が、わずかに眉を寄せて咎めるような声を上げる。

凝つた刺繡がほどこされた布を田深に被つた人物が、もうひとつむひつの角のところに佇んでいるのが、キアラの位置からも見えた。

どこかで、聞いた声だと思つ。

「そこな男はともかく、大地の民に一体何の関係が有りうか。剣を引きなさい」

「しかし、ロータスさま。この娘はマーリ殿下を……」

「私の言葉が、聞こえなかつたか。イシH」

やわらかくまろやかな聲音が、けれど毅然とした意志を持つて響く。

傭兵は悔しそうな顔つきで剣先を下ろした。

「すまなかつたね、大地の民よ。内輪の争いに巻き込んでしまったようだ」

布を田深に被つた、男の声がそう静かにわびる。キアラはただ黙つて男の姿をみつめていた。

「本当に、申し訳ない」とした。けれど

なぜだらう。とも、懐かしい気がするのだ。この声を、自分は確かに知つている。もつと、ずっと前に聞いたことがあつて。

「これ以上、自ら巻き込まれてくるのであれば、私も考えねばならぬ。そこな男に関わり合つになるのは愚かなことだ。森へお帰り、大地の娘　私はそなたを、傷つけたいわけではないのだ」

でも。

自分が知つてゐる声よりは、随分と時を経た声だと思つ。あれから、そう時間がたつてゐるわけでも、ないとこつのに。

惑つキアラを、布を被つた男はじばらくみつめていたようだつた。

布のせいで、見えない顔。
けれど、確かにそのまなざしは交わって。

「…………ねいじん、 わたし…………？」

キアラが小さく呟いたその声は、あまりに小さくかすれて。通りを吹き抜けていった風に、まぎれて。溶けてしまった。

「おおじれも、おおじれも。

「おおじれも、

呼びかけとれない、それは呟き。
けれど、口に出したその瞬間に、その言葉が何よりも正しこよつ
な、気がした。

びくり、と遠くにある、布を被ったその男の肩がわずかに震えた
ように思った。

けれど、風に溶けてしまつたつぶやきは、彼の元まで届いたのだ
らつか？

不思議な沈黙がみちる。

ひどく長いような、それでいて一瞬のような。

風が吹き抜けて、ほんのせつな。時間さえも流れる」とを忘れた
ような感覚を覚えた。

「ロータス殿下。何を考えていらっしゃるのでしょつか？」

その、静かな空間を破つたのは、空氣を読まない調子で紡がれた、
カツツエの言葉だ。

今の今まで自分を盾にしていたとは思えないなめらかさで、カツ
ツエはキアラの前へ半身を出した。

「貴様、こちらのお方がどなたか心得ていながら、無礼なー！」

イシム、と呼ばれていた傭兵が唸るが、カツツエは面白がるよう
に肩をすくめただけだ。

「それならば、ロータス陛下？」

くすくすと笑いながら、細い手をさらに細めるカツシュを、キアラはただみつめていた。

おうじさま、はロータスという名前なのだろうか？

殿下だの陛下だの。よく意味はわからないけれども、そんな物々しい名前は、あんなに寂しそうにわらついていたおうじさまには、とても似合わない気がした。

「王城におられるべきあなた様が、こんなところでなにをなさつておいでですか？ 悪巧みならばぜひとも混ぜていただきたいですねえ」

「あやまつー」

「黙れ、たかだか傭兵！」ときの分際で、わたしと陛下の歓談の邪魔をするか？」

つかみ掛からんばかりの勢いで唸つたイシュにカツシュが放つた一言は、先ほどイシュたちに追われて駆けて来たひょろ長い男とはまるで別人が発したように厳しく響く。

「歓談ではなかろう、ヴェルヴァルグ」

また聞きなれない名が出てきた、とおハジセマが口にした言葉にキアラは眉を寄せる。

話の流れからいけば、ヴェルヴァルグというのは、カツシュのことになるのだろうけれど。名前が一つあるところなのだろうか？ とりあえず、わかるのは。

おうじさまも、カツシュも。仲良しには見えないとこついとくらいいだ。

「そもそも私は、大地の娘と話していたのだ」

以前よりも、もつと時を経て聞こえた声。

キアラは一步おひじさまのほうへと足を踏み出すが、警戒するイシハラ傭兵たちのせいでそれ以上は進めなかつた。

「おひじさま、なの？」

もう一度、問いかけてはみるもの、おひじさまは答えてはくれなかつた。

「森へ、おかえり。大地の娘。私はそなたを、傷つけたくないのだ」

ただ、先ほどの言葉を、繰り返すのみ。

くるしそうで、せつなくて。声の調子はあの日と変わらないのに。自分の存在を忘れたあの日とは真逆に、今日は帰れと繰り返す、その声。

「ヴェルヴァルグ、そなたも。情報屋を氣取るものにいが、ほゞほどにしておくがよからひ。首を突つ込みすぎれば、戻る道をなくすこともあるわ」

「その言葉、そのままやつへつお返ししたしますよ」

人を食つたような調子でカツツュが言葉を返す。

「私だつて面倒」とは御免だが、友のたつての頼みとあらば、断るに断れなくてねえ。やる氣のない猫が実は虎だつたつてわかる前に、陛下もおとなしくおひじさまでお帰りになられたほうが身のためだと思いますよ？」

ふ、とおうじさまが布の下で笑つたような気配があつた。

「忠告はしたぞ、大地の娘。そして、ヴェルヴァルグ。次は、ない

キアラの質問にはまるで何も答えないまま、おうじさまが踵を返す。

その背に迫いすがりたいと思ひながらも、キアラは動けなかつた。まるで足が地面に貼りついてしまつたみたいだ。

キアラが、私の味方でいてくれるのだと思つだけで、心強く在れるよ。

誰よりも、キアラを求めてくれた、おうじさまが。

今は直接顔も見させてくれなくて。

せつかく約束を守りにやつてきたのに、ただ帰れといづばかりで。

傭兵たちを引き連れて、おうじさまが去つて行く。

カツシュはのんびりとその背中を見送つていて、けれどキアラは結局、彼らの背中が角を曲がつて見えなくなるまで、動けないままだつた。

「おお、ふたつめ。

「君は殿下と知り合いなのかい？」

いつまでたつても、地面に張り付いた足は動ける気がしなかつた。心にぽつかりと大きな穴があいてしまったかのようだ。気持ちはずかすかとして、ちつとも埋まらない。まるで失敗して膨らみすぎたパンのよう。

そんな自分を黙つてみていたカツシュがようやく話しかけてきたのは、充分に時間が過ぎてからのことだったと思つ。少し視界がうるんでいたから、目も少しくらいは赤かつたかもしれない。

カツシュは気まずそうに手を細くして、さりげなくおひじさまが去つていった方角へと視線をずらした。

「殿下って、おひじさまのこと？」

「君の王子様が誰かは知らないけど、さつき傭兵を引き連れていた、布を被つた怪しい男のことだ」

「……わしきのひとは、おひじさまだとおもつ」

顔を見たわけではない。

声だつて、昔とは随分違つていた。

でも。

だけど。

確信めいた予感がある。

さつきの彼は、昔約束をしたおひじさまだ。

「まあ、詳しく述べ知らないけどさ。とつあえず殿下が王子様だった

のは、先々王の時代までだよ。それから3年前までは、王弟殿下。今、彼はロータス国王陛下と呼ばれる事になつてゐる。言つなれば、「この国の頂点に立つ男や」

「じくおうへいか。

耳慣れないその言葉を、キアラは口の中でそつと転がした。

長老様のようなものだろうか、といつ疑問は思つただけで口には乗せないでおく。

そういうことは、ジインに聞いたほつが馬鹿にされないで教えてもらえそうだ。

「大地の民が人間の権力争いに興味があるとも思えないから、ざざつとはしょるけれども。先代の国王陛下って言つのが、ロータス殿下の兄君にある方でね。大変すばらしい方だつたんだが、3年ほど前に崩御なされた。まだ50代とお若いのに、突然なくなつてしまわれたのだ」

宿屋の方へと歩を進めながら、カツシエはゆっくりとした口調でそう語つた。

もしかすると、カツシエは前のじくおうへいかが本当に好きだつたのだろう。

「あまりに突然身罷られてしまったから、いろんな噂が流れたんだよ。中でももつとも有力なのが、さつきの殿下が、兄である国王陛下を……というものでね。事実じやないのかなあと私なんかは思つてゐるわけなのだが」

なんとなく促されれば、地面に張り付いた足もよつやくはがれた。カツシエの悲しみが、さみしい。

淡々と語られる、その言葉が、ひとつひとつ悲鳴をあげてゐるよ

うな気がする。

「本来なら、母君の身分が低いロータス殿下は王位を継承しないはずだった。けれど、先王陛下の第一王子がまだ幼いというので、一時的に、殿下は王位を継がれたのだ。中継ぎ国王、とでも言おうか。先王陛下はよい治世者だったけれど、独裁者でもあった。指揮を突然失つて、混乱した国を、殿下はよく治めたと、言えなくはないんだけれど」

ふう、とカツ・シエはひとつ溜息をついた。

「先王陛下を、弑したかもしれない彼を、私は許せないんだよ。突然お倒れになつた陛下を、顔色ひとつかえず見下ろしていた、殿下を弑していないと、なぜ言えるのか」

ひとと、ふたつめ。（後書き）

弑する 王・親など目上の人を殺すこと、らしいです。
誤字修正しました。10 / 30

ヒカル、みつめ。

キアラは黙つて、口を閉ざしてしまったカツシュをみつめた。
「くおうくいか、を殺してしまつたかもしれないおうじさま。
でも、あんなにも優しかつたおうじさまが、大切な兄君を殺した
りするだらうか？

部屋へと戻る道筋をたどりながら、キアラはゆっくり考えた。
けれど、そんなことはキアラにはどうやっても知りつる」とが出
来ないことだ。
噂が真実かどうかなんてことを、本当に知つているのは、やはり
おうじさま当人をおいて他にはいないだらう。

「まあ、とりあえずや。先だつて、先王陛下の第一王子が成人した
んだ。成人したからには、王位を継げる　けれど、ロータス殿下
はなんだかんだと理由をつけて、王位を返上しなかつた。痺れを切
らした王子殿下は、仲間を募つて王位を奪還しようとして」

「」でカツシュは言葉をいつたん切つた。

「あまり表向きには知られていなうことなんだけどね？ 奪還に失
敗したんだよ、王子殿下は。で、市井に下りて、ロータス殿下の手
を連れようとして、どういう風の吹き回しか、ジインを頼つた、と
いうことらしい」

「ジイン？」

先ほどから、繰り返される「王子」「殿下」という単語の意味に
ついて考えをめぐらしていたキアラは、突然カツシュの口から飛び
出したその名前に田をしばたかせた。

おうじさまと、それにつけたこさか物騒な話に、何故だか
登場したジイエンの姫前。

「やうやう。ジイエンは今マーリ殿下の足取りを追つてゐるんだよ、
マーリ殿下……」

話の流れから行くと、王子殿下はマーリのことになるのだらう。
自分としては、もうじきまに会つたただけなのに、どうやら二
つとも血なまぐさこ話になつてゐる。

「カツシュさんは、どうしておうじさまと知り合つなの?
「知り合つて血ひほどでもないんだけどね」

部屋に戻つたカツシュは、女将に頼んで温かいミルクをキアラに
くれた。

蜂蜜でもたらしてあるのか、ほのかな甘さが口の中に広がる。
ソファに腰をかけ、カツシュを両手で包み込んで、キアラはジイエン
をみつめた。

「私の本当の名前は、ヴェルヴァルグといふんだよ。国政を王子と共に
に同る、三貴族の一人なんだ」

重大なことを打ち明ける口調で、カツシュは教えてくれたけれど。
キアラにしてみれば、よくわからぬ単語を並べられたに過ぎない。
い。

けれどもせつかく教えてくれたことなので、わからないともいえ
ずに、キアラはまつ一口甘いミルクをすすつた。

「私は、昔の約束を果たしにきたの」「約束?」

「昔、森に来た人に約束したの。私がオトナになつたら、必ず会いに行く。困つてたら力を貸す。私が味方になつてあげるつて」
「その相手がおうじさま?」

カツツェは持ち前の鋭さでそんなことを聞いてきたけれど。
同族のジインにさえ言つてないことを、知り合つたばかりの人間に話す気にはなれなかつたので、一応沈黙をまもつてみる。

「大地の民の約束は、護られるべきものだもの」

呟くように、そついえば。

カツツェは無言のまま顎をなでた。

でも、とキアラは少し思つ。

マーリの言つていた敵が、さつきのロータス殿下で。
ロータス殿下が、自分の探していたおうじさまなら。

護ると約束したマーリと。

味方になると約束したおうじさまと。

どつちを助ければいいのだろう?

ミルクを舐めながら、考えてみたけれど。
いい案はちつとも思いつかない。

膝を抱えて、窓から見えるお城を眺めて。

いつしかカツツェの存在すら忘れて、キアラはただ唇をかみ締めていた。

ひとと、みひとつ。（後書き）

回収作戦、終了しました…

が。次から新章になります。

なんだかぐだぐだしていますが、面白こと思つてもうべるよひに頑張
りうつと思つてます^ ^

ひとつめ。

「そういうえば」

随分と長い間考え込んでいた気がする。
考え込んだ割には、まったくといっていいほど答は出なかつたけれど。

カツツエは気長にぼんやりと外を眺めつつ、待つてくれたようだ。

「カツツエさんは、どうして神殿にいついていたんですか」「ん……調べ物?」

ぼんやりとしていたせいか、もしくは半分意識が夢の世界に飛びかけていたのか、カツツエの言葉に勢いはなかつた。

「昨日の夜からなれない肉体労働をしていたから眠くつてねえ」

ふあ、とジインの欠伸に負けないくらい大きな欠伸をひとつして、カツツエは軽く体を伸ばした。

「肉体労働?」

「神殿に忍び込んだといつたらう?」「神殿?」

そういうれば、そんなことをいつていたような気がする。

「王子の神殿だよ」

昨日、ジインとカッシュがマーリが残した手がかりに関係があるとかどうとかで話題にしていた神殿のことだろうか。

記憶を掘り起こしていると、カッシュはさうこのんびりと口を開いた。

「何かありそ娘娘って言つので、土地勘があるわたしとジインで様子を見に行つたんだよ」

「はあ」

「君は寝ていたし、一応女の子だから誰も部屋に入らないように鍵をかけた」

別に、聞いたわけではなかつたが、カッシュは部屋にいなかつた理由をそう説明してくれた。

閉じ込められたのではないらしく。

開け方は以前わからないままだつたが、一応ちゃんと内側からも開くらしい。

「それで、なにかわかつたのですか？」

「あんまり収穫はなかつたねえ」

首を回して肩周りをほぐす仕草を見せたカッシュは、机の上のかわいらしき鉢に盛つてある焼き菓子らしきものに手を出した。

「筆頭巫女の姿が昨夜から見えないってことくらいかな」

「筆頭巫女？」

「神殿につめる巫女たちの中で、一番位が高い巫女のことだねえ。今は、マーリ殿下の姉君にあたる、ユーリティカ王女がしていたと思つたけどね。お飾りの巫女が多い中で、彼女はホンモノだつてい話だけど」

カツシュの薄い口の中に、焼き菓子が軽い音を立てて消えていく。

「なんにしても、砂禍が飛来しよつて言つての時期に、姿が見えなくなるなんて平和じゃないねえ」

カツシュがいいたいことは半分もわかつていないのでうが、要是マーリのお姉さんがいなくなつたといつことか。

追われていたマーリと。

そのマーリと連絡が取れなくなつたといつ事実と。姿が消えたといつマーリのお姉さん。

話がわからなくて、これは充分に物騒な符号ではないのだろうか。

「マーリは、お姉さんを追つていったかも、知れない？」

「マーリ殿下が残したメッセージは、神子の神殿を暗示するものだつたからねえ。可能性は充分にあるとは思うよ」

「マーリの、行方は？」

「それがわかれば苦労はしない」

忍び込んできたという割に、実は成果がなかつたらしい。

まったく悪びれない調子で肩をすくめたカツシュは、部屋に常備してあつたコップに注いだレモン水を一息で飲み干した。

「そういえば、ジインは？」

ジインは大地の民だ。

カツシュと神殿に忍び込んで見つかつたなら、明らかに運動が苦手そうなカツシュを逃がすために、自分が困になる可能性が充分にある。

けれど、カツツエが戻ってきてから結構な時間が過ぎているのに、
ジインはまだ戻ってこない。
もしかして、別行動をしていたのだろうか？

キアラの問いに、カツツエはああ、と今思い出したように肯いた。
その手には、もうひとつ摘み取った焼き菓子がある。
この焼き菓子は、本当においしいねえとじつでもいことを呟き
ながら、カツツエは答えた。

「今頃神殿兵につかまつてんじゃないかな？」

は？

あまりに予想外のその答えに、キアラはただ目をしばたくことしか出来なかつた。

ふたつめ。

「え、ちゅ……っと、待ってください？」

今のは聞き間違いかもしれない。

友達といつも、知り合いがつかまっているかもしないのに、のんびりお菓子を食べている人はあまりいないと思つ。

自分の考えに納得して肯き。

キアラは軽く息を吐き出した。

「すみません、ちょっと聞きまちがえちゃったみたい。もう一度いつてもうれます?」

「だから」

カツチュは困ったようにわずかに眉をよせ。
キアラをみつめて、ゆづくじと言葉を繰り返した。

「ジインは多分、神殿兵に捕まつてこると想つよ

「なんで?！」

繰り返されたその言葉に、キアラは今度こそ疑問の声を上げた。

「なんでと言われても。私は肉体労働系は苦手なんだよねえ

少なからず始める響きも混じっていたと思つたが、カツチュは平然と肩をすくめるばかりだ。

「眠り男の本領發揮というべきか。追われている最中にいきなり眠いとか言い出すもんだから参ったよ」

「眠いって……」

「まあ、眠り男だから、仕方がないといえば仕方がないんだけどねえ」

「そんなあつさり……。ジインは一度眠いとなると、もう起きていられないんですか？」

「うなつてぐるとい、どちらを咎めるべきかとこいつとも、これとか迷う。

見捨ててぐる方も見捨ててぐる方だが、眠いといって非常事態に寝るほうも寝るほうだ。

命がかかっているとなればいくらか我慢もききそつなものだが、と問うたキアラに、カツツヒは器用に片眉をあげただけだった。

「意志の力でどうにかなるものだつたら、眠り男とは呼ばれていないだろ？」「いだらう

あつさりといってくれるが、はたしてそれだけで片付けていいものなのだろうか。

みつづぬ。

それで、だ。

溜息混じりにカツシエは言葉を継ぐと、ロップにもう一杯レモン水を注いだ。

「戦闘中にいきなり寝たから、見捨ててくれる」としたんだよ」

そして、そんなふうに説明をしてくれる。

「そんな」

キアラは思わず顔をしかめた。

「殺されちゃつたりしたら、どうするんですか」

キアラだつて、人間の詳しい話を知っているわけではない。
けれど、大地の民だつて、森や神域に故意に許可なく進入するものがあれば、警告の上危害を加えることもあるし、場合によつては命を奪うことだってあるのだ。

ましてや、今回。一人が忍び込んだのは神子の神殿だといつし、明らかに不法侵入者である。

殺されたつて、文句は言えない。

キアラのそんな思いを知つてか知らずか、カツシエは軽い調子で手をパタパタとふつてみせた。

「だーいじょうぶだよ。眠り男は死なないから」

「いつたい、何の根拠があつて！」

「ところ構わづ眠らざにはいられない体にしちやつたんだから、神様だつてそれくらいの融通はきかせてくれるよつてことじゃないの

かなあ？」

「マジメに受けとつてもこいのか、それとも話半分にしておくべきか。
悩んでこらへりながら、カツシは話が終わったものと判断したらし
い。」

「とりあえず、ここを出ましょうかね。私だけだつたら無理なお話
だけれど、キアラさんがいるんだつたら、ジインの回収くらいはで
きるかもしれないし。ロータス殿下だつて、まさか見張りもおかげ
に帰られてはいらっしゃらないだろ？」

「ジインを、助けに行くの？」

「行かないの？」

くすりと笑つて、カツシはコップの水を飲み干した。

「マーリも、助けに行かないと……」

眩ぐよつて言つ足せば、カツシもそうだねえと肯いた。

「でもとつあえずジインを回収しないこと、私たちは戦力不足だと思
うのだよ。私は無料な武器なんか手にして戦うのはコメンだからね
え」

「ジインは神殿に？」

「たぶんね」

「武器を持つて戦うのが無料とか。

肉体労働は苦手とか。

知り合いが命の危機にござらわれそなとき、気にするような問
題ではないと思うのだが。

とりあえず、突っ込むのはやめておいた。

適材適所。

出来る人が、出来ることをやればいい。
ヘタに手を出されても、たぶん。こぞといつ時は足手まといなのだ。

ほうりつぱなしだつた荷物の中から、財布らしきものを取り出したカツツェに続いてキアラも部屋を出る。

太陽は中天から、少しばかり西に傾いていた。

よつめ。～Side・ジイン

頬に、なにか冷たいものが当たる。

規則正しく落ちてくるなにかに、重い瞼をよじりと持ち上げれば。

その冷たいものは天井から落ちてくる水滴のようだった。

「う……」

なんだろう、体中が痛い。

痛む体をなだめながら、状況を把握するべく辺りを見回せば。じめっと湿った石の床と、無骨な鉄格子が目に入る。灯がほとんどないため薄暗く、時折低いうめき声のようなものが聞こえた。

「あー……おれ、つかまつたのか」

何をしていた途中だつたかと記憶を手繰つてみれば、カツチョと神子の神殿に忍び込んだ事實を思い出す。そういえば、逃げている途中で耐え難い眠気に襲われたのだった。

空氣の匂いをかいでも、かぎなれないヒトの匂いとカビと湿氣の匂いしかしなかつたから。多分カツチョはうまく逃げることが出来たのだろう。

運動神経は鈍いくせに、逃げ足と危険察知能力だけはすばらしい男である。

首を回して体をほぐす。

手足が動かしにくいと思つたら、手首と足首に鉄球のついた枷がはまつていた。

「 セー、ビツするか……」

逃げている途中で、結局眠気に耐え切れず寝てしまったのだから、カツシロはさぞ苦労したことだろう。それとも、せっさと見捨てて逃げてしまつて、特に害はなかつたか。

カツシロの正確から鑑みると、後者な気がとてもして、なんとかくこめかみの辺りに手をやつた。

とりあえず。

眠つてしまつた状況から考えるに、ここは神子の神殿の地下牢の可能性が高そうだ。

宗教戦争時代の神殿地下でもあるまいし、地下牢などほど使用する機会などございませんわと笑つた筆頭巫女コーリティカの白い笑顔を思い出した。

『 ジヤいませんわ、といった割にヒトの気配がするのは、清純無垢な顔をしてしらつと嘘を吐いていたのか、あるいは、ユーリティカの感知しない所で使われていたのか。

どちらにしろ、日々神子の神殿が見える、神殿横の資料館で働いてはいたものの。

神殿内部のことほとんど何もしらなかつたことに、今更ながら思い至る。

そういえば、キアラはどうしたのうか。

王都に出てきた疲れからか、眠つてしまつたキアラを宿においてきたものの。 実を言うと、今回の仕事にキアラを関わらせることについては、少しばかり迷つたのだ。

あんなでもキアラは成人した大地の民のひとりだし、ある程度の

危機は自分で片をつけるだらうが。

けれど、ここは王都だし。

権力争いとは無縁に生きてきたキアラにとって、マーリが運んできた厄介ごとは理解しにくい事象だらう。

下手をすれば時期國王になるかもしれないマーリとキアラが関わることは、キアラがこれから平穏に生きていくには邪魔になるかもしないと、ちらりと考えた。

迷った挙句、結論を先延べて。

キアラは宿に置き去りに、カツシエと一人だけでやつてきたのだが。

それは失敗だったかもしれない、と少しばかり後悔する。すぐ帰るつもりがこんなことになってしまったし。

「しまつたなあ……」

カツシエが余計なことを、キアラに教えていなければいいのだが。キアラが余計なことに首を突つ込む決意をしていなければいいのだが。

あまりにも、無垢な大地の民の娘。
手の中に閉じ込めて護つていくには、王都はあまりにも外野がうるさい。

今すぐにでも森の安全地帯に送り返してしまいたくて、ジインは深々と息を吐き出した。

二つめ。～Side・ジイン

まあ、なにはともあれ、とりあえず。

今は出来ることをするだけだ。

ここを抜け出さないことに、マーリの手がかりをさがすことも出来やしない。

キアラは大地の民としてマーリを護ると決めたのだから、ある程度のマーリの安全が確保されないことは、断言してもいいが決して森へは帰らないだろう。

それならば、極力早く、キアラが成り行きで決めたマーリ護衛の仕事を横から手伝って片をつけてしまうままでだ。さつさと斤がつけば、キアラの平穏な未来にも、あまり影響を及ぼさないと信じている。

どうせひじる。

不憫なマーリや、ユーリティカをほつておくことは出来ないのだから。

何とかしなければいけないのだけれど。

両手と両足を戒める枷が邪魔だ。

「ケイオス」

軽く瞳を閉じて、意識の底を探る。

いつもは不意に落ちてくる眠りで、強制的に引き摺り下ろされる道のりを、珍しく自分の意思でたどって降りていく。

知覚できる、暗い意識。

その果てしない意識の底の、さらに普段は表層にでこない潜在

意識。

たゆたう夢と夢の間をゆづくりと降りていくような、その感覚。

「ケイオス」

もう一度、死すべき宿命の、神子の名前を口にする。
ケイオスがいるのは、ここよりもさらに深い場所。

『よひ、どうした』

夢を不意に、突き抜けたような感覚。
急激に広がる闇が、ぽつかりと空虚な空間を作り上げていくよう
な気がする。

あいも変わらず皮肉げな顔をした男が、いつものよひにやにや
と笑んでいた。

『ジーン、お前からここに降りてくるとは珍しいな』

幾分からかうよひの口調のケイオスに、ジーンは軽く肩をすくめ
て見せた。

『好きで降りてきてるわけじゃないんだが。力を貸して欲しいんだ』

自分の裡に間借りしているよひな神の欠片に頼むのもあまり気が
進まないが。

残念ながら、己の力だけでここから脱出できる気がしないのもま
た事実だった。

別にこのままいたところで、せいぜいが処刑されるか拷問に遭わ
されたりするくらいだろうし。特に不都合があるわけでもないのだ

が、とりあえずこのじめつとした地下から抜け出て、放置してきたキアラの様子を見に戻りたかった。

あの頼りない娘は、王都にはあまりに不似合いだ。

カツツエが、キアラを保護してくれるような紳士ならばよかつたのだが、墜ちていく者を見て楽しむ悪趣味さ加減を持つていることを考えれば、あまり期待は出来ない。

むしろ、面白がって、逆に渦中に引き込む恐れがある。

『力？別に死ぬわけではないんだ、殺されて捨てられるのをいつものように待つていればいい』

『今回ばかりはそういうわけには行かないんだよ』

『同族の、あの娘か？』

意識が半ば同化しているのだし、わざわざ問わなくともわかつていそうなものなのだが。

いつもながら、ケイオスは意地が悪い。

『キアラは、森が似合っているよ』

溜息交じりに答えるべく、ケイオスは満足そうに笑みを深くした。

『まあ、体を間借りしているわけだからな。力を貸すのも、やぶさかではないぞ　ほら、還れ』

なんだかニヤニヤしながら、聞き覚えのある台詞をはいたケイオスは、面倒くさがり、追い払つよつた仕草で軽く手を振つた。

毎度おなじみの、押し返されるような弾かれのような感覚に襲われて。

はつと田を開ければ、そこはもとの地下室だつた。
ただ違つのは。

枷が塵になつていいくことくらい。

瞬く間に、両手両足を戒めていた枷はさらさらと風化して、砂となつて落ちていく。

部屋を仕切つていた頑丈な鉄格子までがさらさらと塵と化していつたのは、ケイオスのわかりにくいサービスだったのかもしれない。

むりつぬ。

カツツェに連れられて、幾本かの裏道を抜け、大通りをあるき、屋台で買った軽い朝食兼昼食を取りながらやつてきたのはお城のような建物だった。

白い外壁に、いくつかの塔。

「……おしろ？」

食べかけの揚げたパンをかじりながら、キアラは思わず呟いた。

王都にやつってきた時に、大地の民によくにたおっちゃんに、お城だと教えてもらった建物と同じくらいに大きくて、白くてキレイな建物だった。

ただ、お城よりも開放感は高いかもしれない。

入り口は、細かな彫刻がほどこされた一抱えほどもある柱が、たくさん並んでいた。

「いやあ、違うよ？」

のんびりとした口調で答えるカツツェは、建物の影からちらりと入り口の方を窺つた。

入り口には、ぴかぴかした鎧をきた兵士が数人、いかめつらしい顔つきで前をにらんでいる。

手には、鋭い槍。

「君は、神子の神殿だ」

「……ふうん？」

お城ではないといつことか。

首を傾げて瞬くキアラに、カツシュはもう少し言葉をたしてくれた。

「死すべき宿命の神子ケイオスを祀る神殿だよ
「マーリのお姉さんが筆頭巫女をやつしるといひで、ジインがつか
まつてるかもしないとこり?」
「やつだね」

カツシュがうなずくから。

キアラは少し空氣のにおいを嗅いでみた。
もしかしたら、ジインのにおいがするかもしないと思ったのだが、生憎と埃と砂と、嗅ぎなれないニンゲンたちと、カツシュの匂いしかわからなかつた。

屋台のおいしそうな匂いもしたけれど、食べだすときりがないので、そこはあえて気づかないふりをしておく。

「見張り……いるけど、忍び込めそうだね」

じつと見ていると、見張りは案外ひまそうだ。
自分のほかにも見張りがいるという安心感からか、前を見てはいるものの、どうも集中力に欠けるといつも。頑張つてはいなさそうな印象がある。

「わたしはやめておいつと、昨日もこつたんだけどね?」
「じゃあ、じこで待つてます?」

渋い顔をするカツシュにそつ問えば、その細い目がせりに細くなつた。

「大地の民つて言つのは、誰もがそんなに無謀なのかい?」

「無謀も何も。隙だらけだから、行けそなんですもん」
じゅざいり、昨日もジインと同じような会話をしたらしい。
見張りに視線を戻しながら、キアラは少しばかり首を傾げた。

ななつめ。

カツシュは心底いやそうに溜息をついた。

その気持ちはまあ、わからないでもない。

恐らくカツシュは昨日、大丈夫だと言い張るジンに半ば強制的に連行されて、あげくジンは途中で眠気に襲われて、耐え切れず眠ってしまったのだろうから。

「私は眠気に襲われないので大丈夫です」

カツシュを安心させるべく、そいつとそう言ってみる。

一人で行く、というのももちろん選択肢のひとつではある。けれど、カツシュは昨日神殿の中に入っているのだ。それなら一緒に行つたほうが、少しくらいは内部のことがわかるのではないかと思うのである。

「……いやですか？」

カツシュが何の反応も示さないので、キアラは声のトーンを落としてそう聞いてみる。

しょぼんと耳までたれたのは、別に意図したことではない。
野山で駆け回るのは得意だが、建物の中というのが苦手なのだ。
匂いのもとをたどりにくいし、なにより視界が狭い。物音だつて外よりずっと反響する。

「ああああわかったよー。」

しょぼんとしたままカツシュをみつめていると、半ばやけくそ気味にカツシュは声を荒げた。

「わかつたよ、いくよ。行けばいいんだが!」

「……そんなにいやなら、一人で頑張ります。迷うかもしれないけど、ニンゲンにはつかまらないだらうし」

迷つても、本気で駆ければ、ニンゲンは大地の民に追いつくことなど出来ないはずだ。

行き止まりに迷い込んだといふで、ある程度なら、力で追い払つて見せる。

「いや、いいよ。いくよ。ジインも昨日見捨ててきたからね……」

ジインがいないことにいつも飄々としているように見えたが、少しは気にしていたらしい。

自分を納得させるようにカツシユはつぶやくと、はあと深く息をついた。

「まあ、ジインはもとから助けにいくつもりだつたんだけどさ。たびたびいつているけど私は肉体労働が苦手なんだよ」

「……忍び込まないで、ジインを助けるつもりってことですか?」

「見張りに立つてる神殿兵が、いつもの子だったら、お友達特権で通してもらえるかなあと思つたんだけど」

「お友達特権?」

「そう、うちの屋敷で働いてるメイドの弟がこここの見張りだつたんだよねえ」

なんだかよくわからないが、知り合いの兄弟で顔見知りだから、ということだらうか?

首を傾げて意味を考えていると、カツシユはもうひとつ溜息をついた。

「でも、昨日も今日も見張りに出てないんだよねえ。いつもより兵士の数も多いし……」

「その割には暇そうですねけどね?」

「一般人には!あの数だけで充分な威嚇になるだろう?」

イッパンジンが何を指すのかはイマイチわからないが、少なくとも大地の民の脅威にはならない。

けれど、彼らを見ただけでカツツェがいやそうな顔になるくらいだから、あまり戦闘に慣れていないニーンゲンには、少しくらいの効果はあるということだろう。

「……よく、わかりませんけど。とりあえず、ジインはどうにいると思いますか?」

「そこなんだよねえ。そもそも神殿に罪人を捕らえておく場所はなはずなんだ。けれど、牢がある兵舎のほうに、ジインらしき男が捕らわれたという情報はないし」

ずっと一緒にいたはずなのに、いつのまに調べたのだろうとキアラは不思議に思つたが、カツツェがマジメな顔つきをして考え込んでいたから、水をささないでおくことにした。

「あと、可能性があるのは、神殿の地下、かな」

「地下?」

「今も使われているのかはわからないんだけど、昔宗教戦争って言う馬鹿らしい争いがあつた時代があつてね。そのころ、異教を信じる人間を捕えて置く場所が地下にあつた、という記録が残っているんだ」

やつしゅ。

「よし、じゃあさつと地下ですね。地下室を田舎しましう

あつさりとキアラがそう決めると、しぶしぶといった様子でカツシエも頷いた。

辺りを見回せば、神殿の周りにはえている木々の下に、いくつかの石があるのが目に止まる。神殿兵の田に付かないように気をつけ、キアラは比較的大き目のひとの拳ほどの石をふたつ、みつ手にとった。

「カツシエさん、私が気を引きます。合図をしたら、先にいってください。適当なところで隠れていてくださいれば、すぐに見つけます」

カツシエはさらに嫌そうな顔をしたが、キアラは構わずカツシエから距離を取り、手にした石を神殿兵の右斜め後方に向かってなげつけた。

神殿兵たちの死角をついて、石は綺麗に弧を描いて飛び。茂みに落ちて、がさりと大きな音を立てる。

「行つてください！」

声を殺してそう叫び。身振りでカツシエを促すと、カツシエは相変わらず手足が邪魔そうな様子で駆け出した。

同時にキアラも飛び出して。

音に気をとられた神殿兵たちに、すばやく殴りかかる。

鞘をしたままの大剣で、みぞおちの辺りを軽く殴つてやれば、神

殿兵たちは一言づめいて崩れ落ちた。

手加減も一応したし、そういう被害はないはずだ。

ポケットに忍ばせていた紐で、意識をなくした神殿兵たちを手早く縛り上げ、とりあえず茂みの中へと引きずついて転がしておいた。

口の中にも一応布きれを突っ込んでおいたが、猿轡をかませるにはしないでおく。

おそらく、忍び込むといつ目的を達する間くらいは意識がないと見込んでのことだった。

こちらの目的に支障さえないのでなら、彼らにしてみても、早く助けでもうたほうが良いに決まっているのだ。口の中の布さえ吐き出すことが出来れば、声を上げて助けを求めることが出来るだろ？

神殿の入り口に足音を殺して忍び込む。

床はぴかぴかに磨かれた鏡のような白い石で、マーブル状のグレイの模様が入っていた。

入り口にはあんなにも兵士が多くたのに、一歩中へと踏み込めば、今度は二ングンの気配すらもない。
しんと静まり返った空間に、ただ幾本もの柱がそびえたっているばかりだ。

「……いやなかんじ」

つぶやいた、その言葉に特に他意はない。

空氣はただひんと張り詰めて、冷たく澄んでいる。

もし、空氣を視覚化できるのなら、せつと鏡のよつた湖を思わせるに違いない。

けれど、澄んだその空氣は、なぜだか不穏な氣配を底に忍ばせているような気がした。

「キアラさん」

匂いをたどるまでもなく。

カツツエは柱の影で待つていてくれたらしい。

低くよんと合流すると、ただその柱の間のさきにある、大きな扉を指差した。

「地下には多分、筆頭巫女の居室からいける」

「それが、あつち？」

「わからないけれど、筆頭巫女なんてのは、この神殿で一番力を持っているんだ。普通、えらい人の部屋って言つのは、一番日当たりがよくて、一番大きな部屋だと思うんだよね？　ついでにわかりやすく」

「よくわからないけど、カツツエさんにについていきます」

森で育った自分と違つて、カツツエは建物にも詳しいに違いない。そう思つて宣言すると、カツツエはまた嫌そうな顔をしたが、とりあえず先に立つて歩き始めた。

気がつくと、なぜか豪奢な部屋にいた。城の中のように、真っ白い壁。たっぷりと布を使って作られた厚いカーテン。毛足の長い絨毯に、貴族の姫が好んで用いるような、天蓋つきの大きな寝台。

「……じじだ、じじは」

城の中の部屋のような造りだが、城でないのはわかっている。眉を寄せて呟いて、ぐるりと部屋の中を見回す。

城に昔からすんんでいるという事実もあって、恐らく見たことのない部屋はないだろうが。残念ながら、この一見城の中の部屋のよつなこの部屋の内装には、まったくもって見覚えがなかった。

「……じじがどこかはまつたく予想がつかない。

ついでにいうと、拘束されていいわけでもない。

服は、町民たちが着るような、意識をなくすまで着ていた服を着たままで。

服と部屋のギャップが、妙に田に付いた。

「そもそも、なんでおひなさんいるんだ」

頭の芯が重い気がする。

張り切つて動いてくれない思考回路をなだめすかして記憶をたどる。

姉を乗せた駕籠を追つて、門番の田を盗んで、門から王都の外に出たのはまだ晩のうちだった。

王都の外で、馬車にでも乗せられたらどうやって追つて行く？

考えをめぐらせていたのだが、幸いにも、姉がすぐに馬車に移し変えられることはなかつた。

王都の外には、広い平原がひろがつてゐる。

そもそも王都は、すこしづかく小高い丘の上に広がつてゐるのだ。その外側は、前述したような広々とした平原と、蛇行しながらも穏やかに流れる川と、川に沿つて下つていつた先にある、大地の民が棲むと言われる巨大な『森』。その森が切れる先には、地の果てへ続くよつた断崖があり、海が広がつてゐるといふ。

つまり。

話をまとめるならば、こぢら側は、誰の領地でもないということだ。

道理で、脳裏に地図を描いたときに、誰の名前も浮かんでこなかつたはずだ。

法の上ならば、こぢらは王の領地。

けれど、その王をえ手出しを出来ない、自然の大地。

いくつかの村があることにはあるが、先住種族の力を借りて細々とやつている彼らに、王への忠誠や税を払う意志などあるわけもない。下手にそれを咎めて兵を出せば、返つてくるのは人間よりもはるかに身体能力に優れた先住種族の報復ばかりだ。何の益もない。

そういう事情によつて、放置され続けた丘をみつめて、少しばかり溜息をつく。

平原だということは、隠れる場所がないということだ。

今は塙の影に身を潜めてはいるものの、このまま駕籠が王都から離れていけば、そしてそれについていくならば、ほどなく駕籠を担ぐ傭兵たちに、自分の存在が知れてしまうことだろう。

「……ねえさま」

どうすればいい。

どうやれば、気づかずには追える?

頼みのジョンはまだ来ない。

せめて、駕籠の行方を見届けようと、塙の影から田を凝らした。すると。

駕籠は、川沿いではなく。

どちらかというと、先住種族たちと人間の領土の境界地
あた門から、王都沿いに進んでいくようだった。

これはもしかすると、うまく追えるかもしれない。
軽く呼吸を整えて、塙沿いに、そっと駕籠を追う。
そのときだった。

背後からのびてきた太い腕が、体の自由を瞬く間に奪ったのだ。
驚いて、硬直したのは一瞬。
すぐに肘を相手のみぞおちにでも打ち込んでやられると抵抗したが、
それよりも早く。

つんと田の奥に残る刺激臭をはなつ布で鼻と口とを覆われた。
呼吸をとめて抵抗を試みるも、ほどなく意識が薄れて、暗転した
のである。

（後書き）マーリ・side～おひるねマーリ

久々のマーリ視点です。

断じて存在を忘れていたとかではありません……

昨日更新分の、間抜けなミス修正しました。

「つまり、だ」

静かな部屋の中に、自分の声だけが妙にほつきつと響いた。
「ぼくは、さらわれたのか？」
だれに？と言つのはわからない。

ただ、あまり歓迎すべき状況でないことだけは確かだ。
連れ去られた姉と、自分と、背後から来た何者かの位置関係から
考えるに。

姉を連れ去つた連中と、自分を拉致した連中が、協力関係にある
といつのは、少し考えにくい。

まあ。

姉を連れ去つた連中の仲間が、なんらかの事情で別行動をとつて
おり、あとから追つてきたときに。こゝそり後をつけている風だつ
た自分に気づいて捕獲した、という可能性もなくはないのだが。

なんとなく、違つ気がする。

明確な、理由など何もないのだけれど。

ただ、なんの目的もなくさらつたのだとも思えはしない。
着ていたものこそ、そのままだが。

あまりに、整えられた、豪奢すぎるこの部屋。

それも、王族が使う部屋の調度にあまりに似た家具。
室内。雰囲気。

これはもう、どう考へても、自分が先王の息子マーリであることを
知つてこるとしか考へられない。

なんの理由があるかなんてことは、さっぱりわからないのだけれど。

ひとつ、確信を持つて思えることは。

これを画策したのが、おそらく、今現在王の位にある、ロータス叔父ではないということくらいだ。

今現在敵対している人物を讃めるのもあまり気が進まないが、叔父が噛んでいるならば、もう少しこの部屋は趣味がいいはずだと思うのである。

明らかに、城に似せて作られた部屋。

けれど、何かが違う、趣味の悪い部屋。

「……気持ちわる

思えば、ここは王の部屋に似ている気がする。

父がまだ生きていたころ。遊びにいった、父の居室に。

まあ、格段にこちらのほうが趣味が悪いのだが。

いつたい、自分をさらつた人間が、どういった意図を持っているかわからないことには。
どうにも手のうちようがない。

あのお人よしの大地の民は、どうしただろうかと。

ふと、自分が強制的に巻き込んだお人よしの男を思つてみる。

そろそろ、自分が残した暗号には気づいてくれただろうか。
姉の救出に動いてくれているだろうか。

できればそのついでに自分のことも助けて欲しいものだが

「うなつては、それもむずかしいかもしない。

「じのんと諦めて寝台に寝転んで、天蓋の内側をみつめる。そこには、空ろなる存在《もの》、創世の神、セリヌンティウスが己の存在に気づいて孤独に涙する、という内容の宗教画が描かれていた。

その涙をみつめて思ひ。

死すべき神子、伝説上のひとは。
自分の存在を疎んだりはしなかつたのだろうか。
自分が死すべき宿命を負つて生まれてきたから。

世界もまた、いつか終焉を迎える宿命を負つてしまつた。

姉が予知した砂禍^{さが}の飛来は、終焉の前兆だといわれる。
くわしいことは自分もよく知らなかつたが。

砂禍は、滅びをもたらす神子の欠片だ。

落ちた周辺を、命の芽生えぬ大地にかえてしまつ、わざわいのか
けら。

「叔父上……」

砂禍など、飛来しなければよい。

死すべき宿命の神子も。最初からいなればよかつた。

セリヌンティウスが己が孤独に気がつかなければ。

世界は、生まれなかつたかもしれないけれど。未来永劫、変わる
ことなくいられたのに。

「……おじうえ」

まなじりから、じぼれおちた何かが、こめかみの辺りに流れ落ちるのを自覚する。

昔。

父もまだ、存命だつたころ。

自分は、気さくな叔父が大好きだつたのだ。
いつもかなしげな表情をたたえているその顔が、自分にはやさしい笑みをたたえてくれるのが嬉しかつた。忙しい父に代わつて、よく遊んでもくれた。

初めてのつた馬も、叔父がくれたものだつたし。
一緒に遠乗りに行つた事だつてあつた。

本当は、叔父と王位を争いたくなんてない。

叔父はよく出来る人だから、国をうまく治めてくれるに違いない。

けれど、いつしか周りに流されて。

気がついたら、叔父と敵対せざるを得ない状況におちついていた。
いつの間にか、叔父との間には深い溝が出来。

王位を得なければ、自分が死んでしまうといつもいつまづな状況にまでおちついていた。

いくら後悔しても、時は巻き戻らない。

自分は、死にたくなかつたのだ。

それならば、叔父を殺して、王位を奪うしかない。

その思いは、今現在も変わらない。

久しぶりに、深く自分の心を分析した気がする。
けれど。

もう戻れないところまでできているのだ。

ふかくふかく、息を吐き出していく。

少しくらこは、このやりきれない思いが吐き出されるとい。

がちゅり、と鍵を開ける音が響いたのは。
ちょうどそんなときだった。

ひとと、ひとつね。

カツシHと合流して、神殿の中を歩く。

空気がぴんと張り詰めて、居心地はこの上なく悪い。

嵐の前の静けさとか。なんだかそういうこいつ不穏な言葉がぴったりとくるような雰囲気だ。

誰にもあわず、まっすぐ廊下を歩く。

カツシHの足取りに迷いはなく。いくつか廊下が交わるところもあつたけれど、立ち止まる」とれしないで、ただひたすらにまつすぐに進んだ。

進めば進むほど。

不穏な空気が色濃くなつていくような気がする。

肌が、ぴりぴりとする。たとえば猫が、体中の毛を膨らませるよう。産毛までがちりちりと総毛立つような気がするのだ。

このまま進みたくないといふのは、本能だろうか。

明確な根拠はなく。

ただ、気の進まなさが。
歩みをおそめる。

歩くのがそう早じとも思えない、カツシHとの距離がどんどん開いていく。

空気が体にまとわりついて、動きを阻害するかのようだ。
とみのあるスープの中でもがけば、こんな気持ちを味わうこと
が出来るかもしれない。

「カツシHを……」

けれど、たゞがにこれ以上間があくのは危険だ。

そう判断したキアラが、声を上げようと口を開く。

だが。

カツシロを呼び止める」とは出来なかつた。

濃度の高い空気が、声をも阻む。

そして。

骨ばつた手が。

なんの害意もなく、のびてきて。口をふさごだから。

「キアラ」

その手を払いのけよつとする、その動作さえも。緩慢にならぬ。拒絶が遅れ、そのまま腰を引き寄せられる。

懐かしいにおいが鼻先をかすめ、キアラは相手を押しのけよつとしていた、その力を思わず緩めた。

「……キアラ。キアラなんだよつ?」

かすれた、声。

今にも泣き出しそうな調子で、わざわざくように、呟が繰り返された。

体を拘束してくるその手を、かすかに震えてくるよつな気がする。

懐かしくて、せつなくて。抱きしめたくて。

押しのける代わりに、キアラは。

そつと相手の服をつかんだ。

ひとと、ふたつめ。

体の距離が近い。

鼓動さえも、あまりに近く感じる。

腰を引き寄せられたまま。

キアラはそっと眼差しだけをあげて、男をみつめた。

「おうじ、 セサム……？」

男は、ひどく切なげな顔つきで。

ただこちらを見下ろしていた。

口をふさぐ手は、いつしか力なく体の横に下りていた。

「なぜ、 ここまで来てしまったんだい。 来るなどいっただろう」

呼びかけにこたえることはしないで。

男はいつも苦しげにさえ見える様子で眉を寄せる。

懐かしいにおいが、胸いっぱいにひろがって、キアラはなんだか泣きたくなつた。

いつたいなにが、どうしてしまったのだろう。

匂いも、雰囲気も。なにもかもが、この男をおうじやまだと思ひでているのに。

病的なまでに白い肌も。

月の光を集めて編んだような、薄い金色をした髪の毛も。空のように青い青い青すぎる瞳も。

優しくて、切なくて、寂しそうなその面差しも。たしかに、紛れもなく彼なのに。

「どうして……？」

キアラの予感は、確かに当たっていた。

おうじさまは、やつき宿屋の近くでカッシュを追っていたロータス殿下だった。

「どうして、なの……？」

彼の服をつかむ手が、かすかに震えているのがわかる。聞けば、彼はひどく切なそうに瞳を伏せた。

忘れなくとも、時間は流れ。

その時、脳裏をかすめたその言葉が、すべてを物語つているような気がした。

森であつた人に会いにきたのだと、キアラがジインにいつた時だ。ジインは、すべてを諦観したような顔つきで、そんなことを言わなかつたか。

会えるといいなど、まるで会えないことが決まつてゐるような口ぶりで、確かにそう言つたのだ。

「じ、かん……？」

「君は、本当に変わらない」

自嘲するよし、彼はぽつりと呟いた。

いとしむよしにキアラの髪をなでる手つきはあの日となにもかわらないのに。

彼の周りだけが、時間を重ねたみたいに。

わずか、ほんの数年のことだった。それはすぎだつた。

まだ自分とそり年の変わらなかつた、二十歳前の青年は、もう。壮年の、五十過ぎとも取れる風貌になつていた。

「すまない。君はもう、来てくれないと、私は思つていたのだ」

いつたい、あれから。

おうじさまにとつて、どれくらいの時間が過ぎた？
すべてにおいて、平等に時間とくものは流れるのではなかつたのだろうか。

「本当に、すまなかつた。君の、純粹な約束を。誇り高き大地の民の、約定を。疑つてしまつた」

悔いのよつにさせやかれるその言葉を、キアラはただ音の連なりとして聞いていた。

頭の中がぐるぐるとして、まるで意味を捉えられない。
なにが言いたいのかも、よくわからぬ。

ただわかるのは。

彼がなにかを悔やんでいるといふこと。

自分には訪れなかつた時間の流れに、彼はすっかりと流されて。年を重ねてしまつたといふことからだ。

とおど、みつめ。

「うたがつた……？」

髪の上を、おうじさまの手がすべる。
優しく梳いてくれる、なつかしいその感触。

幼子のように田をしばたかせて、キアラはただ彼をみつめた。

「そうだ。本当に、すまない。私が森を出なければいけなかつた、
あの日。君の姉上（アーヴィング）が言つていたのだ。妹が つまり君が。私のも
とに来ることはない」

彼の言葉は淡々と紡がれる。
そこには、憤りも。恨みも。なにもない。

「どういひこと？」

数年前の、あの日。

キアラは確かに約束したのだ。

成人したら、きっと王都に行くと。彼の味方になると。

自分よりもずっと大地の民らしい、姉たちが。

大地の民が約束をする意味を知らないはずがないというのに。

「行きたくても行けないのだといつていた。私はそれを、君がまだ
成人していないせいだと思っていた。だから 」

いつそう遠い目をして、彼は少しだけ瞳を伏せた。

腰に回されていた手がゆっくりと下ろされた。

髪をなでていたても、最後に惜しむようにひとなじで。そつと離れた。

「3年たち、5年たつても待っていた。成人すれば、きっときてくれると思って、ずっと待っていた。けれど、君は来なかつた。10年たつころにはきっともう来ないのだろうと憤りながらも君を待ち。20年たつころには、待つことに疲れていた。味方が誰もおらず、一番つらい時期はそのころには過ぎていた。王弟として、穏やかな日々を送っていたよ。君のこと、正直忘れかけていた

いつたい、どうことなのだう。

時間は誰のもとも、等しくやつてくるはずなのに。

キアラの、わずか数年が、彼には違つたといふことなのだうか。

離れた手を、さみしく思つた。

昔のように、もつとなってくれればいいと思つた。

けれど。

時間の隔たりは多分。それ以上の溝を、自分と彼の間に生んでしまつたのだ。

「兄が王位を継いで。子供が出来て。30年が過ぎるころには、大地の民が棲まう森へ行つたことさえ夢のことのような気がしていた。そもそも、あの、世界樹の森は。人間の立ち入りを固く拒む土地だから。あの日々が、夢だとしてもかまわないくらいに、平穀で優しい日々だったのだ」

「おうじ、さま……？」

平穀で、優しい日々だったというのなら。

なぜそんなにも、哀しい顔をしているのか。

あの日見たときよりも、ずっとずっと。寂しそうに笑うのか。

「3年前に、兄が亡くなつて。平穏は崩れてしまった。かわいがつた甥までも、私の命を狙つようになつて。部下が甥を追つたら、街中に者がいたと報告してきた。ねえ、キアラ」

吐息のよう、彼はキアラの名前を口にした。

「どうして、マークのところにいるんだい？」

おひじれめ、ヒ。呟いた声は、言葉にはならなかつた。

寂しげなまなざしが、自分を見下ろしてゐる。

「やつと余れたのこ、君はマークを選ぶのか」

その言葉は、別段咎める響きは持つていなかつた。

ただ哀しくて。

ただ切なくて。

ただ それだけ。

「マークを選ぶのない。わたしは

呟きながら、自分に向かつてのばされた手を。

反射的に避けた。

避けてしまつた。

殺意を向けられたわけでも。憤意を向けられたわけでもないのに。
とつさに体が動いてしまつた。

ほんの一瞬。おひじれめの瞳は見開かれて。ついで、静かに伏せられた。

「やつか

「おひじ、や……」

「いいのだ、キアラ。それは、仕方のないことだ」

あおこ、あおこまなざしが。

再びゆづくとこちからを捕える。

名前を呼びたいのに、それはもつ頃葉こありならなくて。

ただ、泣きたいくらいに悲しかった。

別に。マーリを選ぶつもりはなかつた。おひじさまを選ぶつもりもなかつた。

一人が敵だつたらビバつようとは、確かに思つたけれど。おうじさまの口調に、マーリへの憎しみは感じられなかつたから。だから。

「 森く、お帰り。キアラ。今ならまだ、君を見逃すことが出来る。君のようになつすぐな田をしたひとには。ここは悲しそぎるよ」
「ビバつ！」

ほんの一瞬の拒絶に、おうじさまは何を見たのか。
くちびるをかみしめて、問えば。彼は自分が痛いような顔をした。

どうして、そんな顔をするの。
どうして、そんなことを言つの。

伸ばされた手を、思わずよけてしまつたのは。
おうじさまのことときらいだからじゃないの。

そんなことを、言わないで。

そんな悲しい顔をしないで。

私は、ただあなたに会つためだけに、ここまで来たの。

私はまだ、約束のひとかけらさえ。果たしていないの。

「人間の社会は複雑だからだ、キアラ」

胸の中で渦を巻く、たくさんの中。疑問。悲しみと、涙。
もてあまして立ち去くしていれば。

答える声は、背後から聞こえた。

伸びてきた腕が、あつという間にキアラの体をからめどる。

「相手を憎んでいても、手を組み。相手をいとしんでいても、その命を奪う。おれたちには理解できない生き物だからだ」

安心感のあるぬくもりを、背中に感じる。

もつと悲しい顔つきになつたおひじさまの顔をみつめれば、彼はただゆっくりと瞬いた。

その瞳が、かなしさと絶望を映して。

ふと。昔のように寂しくてたまらないのに、優しさに溢れている。

不思議な笑みを浮かべた気がした。

おうじまこと。

「同族のこねいは無条件に安心感をもたり、そんな気がする。けれど、そう思ったのは一瞬だった。」

「その通りだ、キアラ。森へ帰るといい」

「おうじ、」

「よすんだ、キアラ」

「離して、ジイン！」

「おうじさまと。背後にいるジインが。なぜか結託して、自分をおうじさまから引き離そうとする。伸ばされた手を、なぜか避けてしまったけれど。別に、それは何か意図したわけではなく。」

「離して！　食いにきたの！」

助けに行くはずだつたジインが、なぜ唐突にここにいるのか。先に行つたはずの、カッシュはどこにいたのが。ううん、そんなことはどうでもいい。それよりも、どうして邪魔をするの？

おうじさまから、森へ帰れと拒絶された孤独感は、ジインのぬくもりにほんの一瞬。癒されなかつたとは言わない。でも、それに安心してはいけないのだ。背後に甘えたいわけじゃない。

今は、おうじさまに。きちんと気持ちを伝えなければ。

そんなにも、悲しい顔をしているおうじさまに。笑つてもらいた

いのだと。

そんな顔をさせたためにきたのではないのだと。
きむんと、最後まで伝えたいのに。

ジーンの腕を振りほどこうとして力をこめるのに、力強いその腕
は、まるでびくともしない。

叫いても、ひっかいても。ジーンはただ抱きしめ続けるだけ。

「おうじさま、私、会いにきたのよ？ 成人する日を指折り数えて
待つてた！」

あの日。ふらりと森にやつてきた彼を、好ましいと思つた。
それはたぶん。恋愛感情とか、そういうものとは少し違つて。た
だ、なんとなく好きだった。

一緒にいた時間。

一緒に笑つたこと。

話したこと。

やさしい雰囲気。

心地いい時間が、静かに流れで。それがもつと続けばいいと思つ
ていた。

「そんなに時間がたつてたとか、思わなかつた。どうして、どうし
て三十年も経つてるの？！」

だから。

困つているのなら、助けようと思つた。
味方になろうと思つた。

すべてが円く収まつたら。おうじさまはきっと、もっと頼託なく
笑つて。

もつとやせしい時間が流れると、無邪気に信じていた。

「どう、して……」

熱い何かが頬を伝つて落ちていった。

視界がゆがむのは、なぜ。

おうじさまが、まるで自分が苦しいような顔をして、こちらをみつめ続けていた。

「異種族間の婚姻は、防がれるべきだと思つたのだろう」

背後から抱きしめるジャインが、低く呟き葉を継いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1270w/>

忘らるる神の欠片～眠り男の英雄譚～

2011年11月27日22時50分発行